

市道山ノ神森ノ丁線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津城下町遺跡

11次調査

中津市文化財調査報告 第68集

2014

中津市教育委員会

序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての新たな側面を見せはじめています。

一方、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ影響を与えていることも事実です。市内では、中津日田道路や東九州自動車道建設に伴う多数の埋蔵文化財発掘調査が大分県教育委員会により行われ、当市教育委員会も圃場整備事業、市道建設工事に伴う本発掘調査を行っております。また、各種開発事業に伴う試掘・確認調査件数はここ数年減少することなく高止まりしたまま推移しています。今後も東九州道などへのアクセス道路、インター周辺の開発等が予想されるため、埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは続くことが予想されます。しかし、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市字古金谷・字森ノ丁における市道新設工事に先立ち、中津市教育委員会が調査した中津城下町遺跡 11 次調査区の発掘調査報告書です。調査により近世後半の土坑などが発見され、当時の屋敷地利用を考える上で貴重な資料となりました。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となったら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました関係各位、及び、調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

中津市教育委員会

教育長 廣畠 功

例　　言

1. 本書は中津市教育委員会が2008年度に行った大分県中津市字新魚町に所在する市道山ノ神森ノ丁線新設工事に伴う中津城下町遺跡11次調査区の発掘調査事業の報告書である。
2. 確認調査は平成20年(2008)4月28日~30日まで行い、本調査は平成20年5月1日~5月21日まで実施した。遺物実測・遺構図浄書・原稿作成は平成25年度に行った。
3. 確認調査・本調査は浦井直幸が担当した。
4. 遺構の実測・撮影は浦井が行った。遺物実測・撮影・浄書など森ノ丁地区については、(株)アーキジオ大分に委託した。遺構実測図の浄書、古金谷ノ丁地区の遺物実測、その他整理作業は中津市歴史民俗資料館の浅田くるみ、安倍方恵、金丸孝子、古市智子の協力を得た。古金谷ノ丁地区の遺物撮影は浦井が行った。
5. 現場で用いた座標は世界測地系による。
6. 遺構の表記は下記のとおりである。

SK (土坑) SD (溝状遺構)
7. 図面等記録類は中津市歴史民俗資料館にて、出土遺物は旧槻木中学校体育館に保管している。
8. 報告書作成にあたっては下記の方にご指導・ご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

吉田 寛 (大分県教育庁埋蔵文化財センター) (敬称略)
9. 本書の執筆・編集は浦井が行った。

目 次

序

例言

第1章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境.....	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 これまでの調査	4
第3章 調査の方法と成果.....	7
第1節 調査の方法	7
第2節 調査の成果	8
第4章 総括.....	24
写真図版.....	29
報告書抄録.....	38

挿 図 目 次

第 1 図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)	3
第 2 図 今回調査区及び周辺主要調査位置図 (S=1/10,000)	4
第 3 図 遺構配置図 (S=1/400)	7
第 4 図 古金谷ノ丁地区遺構配置図、調査区北壁土層図 (S=1/100)	7
第 5 図 SK-5 平面図・断面図 (S=1/40)	8
第 6 図 SD-1 平面図・立面図・断面図 (S=1/40)	8
第 7 図 SK-5 出土遺物 (S=1/3)	9
第 8 図 SD-1、北壁、調査区内出土遺物 (S=1/3,1/1)	10
第 9 図 森ノ丁地区遺構配置図 (S=1/200)	11
第 10 図 SK-1・2・4・5・6・12 平面図・断面図・土層図 (S=1/40)	12
第 11 図 SK-1 出土遺物 (S=1/3)	14
第 12 図 SK-1・2 出土遺物 (S=1/3)	15
第 13 図 SK-2 出土遺物 (S=1/3)	16
第 14 図 SK-2 出土遺物 (S=1/3)	17
第 15 図 SK-4 出土遺物 (S=1/3)	18
第 16 図 SK-4 出土遺物 (S=1/3,1/1)	19
第 17 図 SK-5 出土遺物 (S=1/3)	20

第 18 図 SK-5 出土遺物 (S=1/3)	21
第 19 図 SK-5、6、12、調査区出土遺物 (S=1/3)	22
第 20 図 中津城下絵図調査区周辺図	24

表 目 次

第 1 表 中津城跡主要調査一覧表	5
第 2 表 中津城下町遺跡主要調査一覧表	6
第 3 表 中津城おかこい山主要調査一覧表	6
第 4 表 遺物観察表 1	25
第 5 表 遺物観察表 2	26
第 6 表 遺物観察表 3	27

写 真 図 版 目 次

写真図版 1 古金谷ノ丁地区 (全景 SK-5 SD-1 北壁 14・17 層遺物出土状況)	31
写真図版 2 森ノ丁地区 (全景 SK-1 SK-2 SK-2 遺物出土状況 SK-4 SK-5)	32
写真図版 3 出土遺物	33
写真図版 4 出土遺物	34
写真図版 5 出土遺物	35
写真図版 6 出土遺物	36
写真図版 7 出土遺物	37

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年4月中旬、中津市役所道路課より市教委へ中津市2196番地他における市道山ノ神森ノ丁線新設工事について協議依頼がなされた。住宅地や空き地に延長約150m、幅員5mの市道を新設するもので、金谷地区の生活道路として供するため計画された路線である。予定地は中津城下町遺跡として周知されており、下級武士の組屋敷が江戸時代に存在していた箇所にあたる。市教委は発掘調査を行う旨道路課へ伝え、4月28日～30日まで確認調査を行った。その結果、古金谷ノ丁地区に設定したトレーニングでは、地表60～70cm下位において複数の土坑状遺構・近世の遺物を検出した。森ノ丁地区では地表40cm下位にて同様の遺構を確認した。

本調査は平成20年5月1日～21日まで行った。

平成20年度、出土遺物の洗浄・接合作業を行った。

平成25年度、出土遺物の実測・撮影・記録等の整理作業を行った。

第2節 調査体制

平成20年度の体制は下記のとおり。(本発掘調査)

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	北山 一彦 (中津市教育委員会教育長)		
調査事務	荒川 節幸	(同)	文化振興課長)
	保科 真	(同)	文化財係長)
	平田 由美	(同)	文化財係員)
調査担当	浦井 直幸	(同)	文化財係員)

平成25年度の体制は下記のとおり。(整理・報告書刊行)

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	廣畠 功 (中津市教育委員会教育長)		
調査事務	川西 州作	(同)	文化財課長)
	田中布由彦	(同)	主任研究員 兼 管理係長)
	高崎 章子	(同)	文化財係長)
	竹内 奈央	(同)	管理係員)
	大竹 竜聖	(同)	管理係員)
	平田 由美	(同)	文化財係員)
担当	浦井 直幸	(同)	文化財係員)

発掘調査は下記の皆さんの協力による。(五十音順、敬称略)

阿部恵子 石塔美代子 川口正代 濑口礼子 田原文子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約8万6千人、面積491km²を誇り、北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。英彦山に源を発する一級河川山国川が市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頬山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

中津城下町遺跡は、山国川河口右岸の沖積平野北西端に位置する。標高3～6mの低地に所在し中津城跡を扇の要として扇を広げた形に城下町が展開している。城下町地下の地山は基本的に黄褐色ローム層で山国川付近では砂地となる。

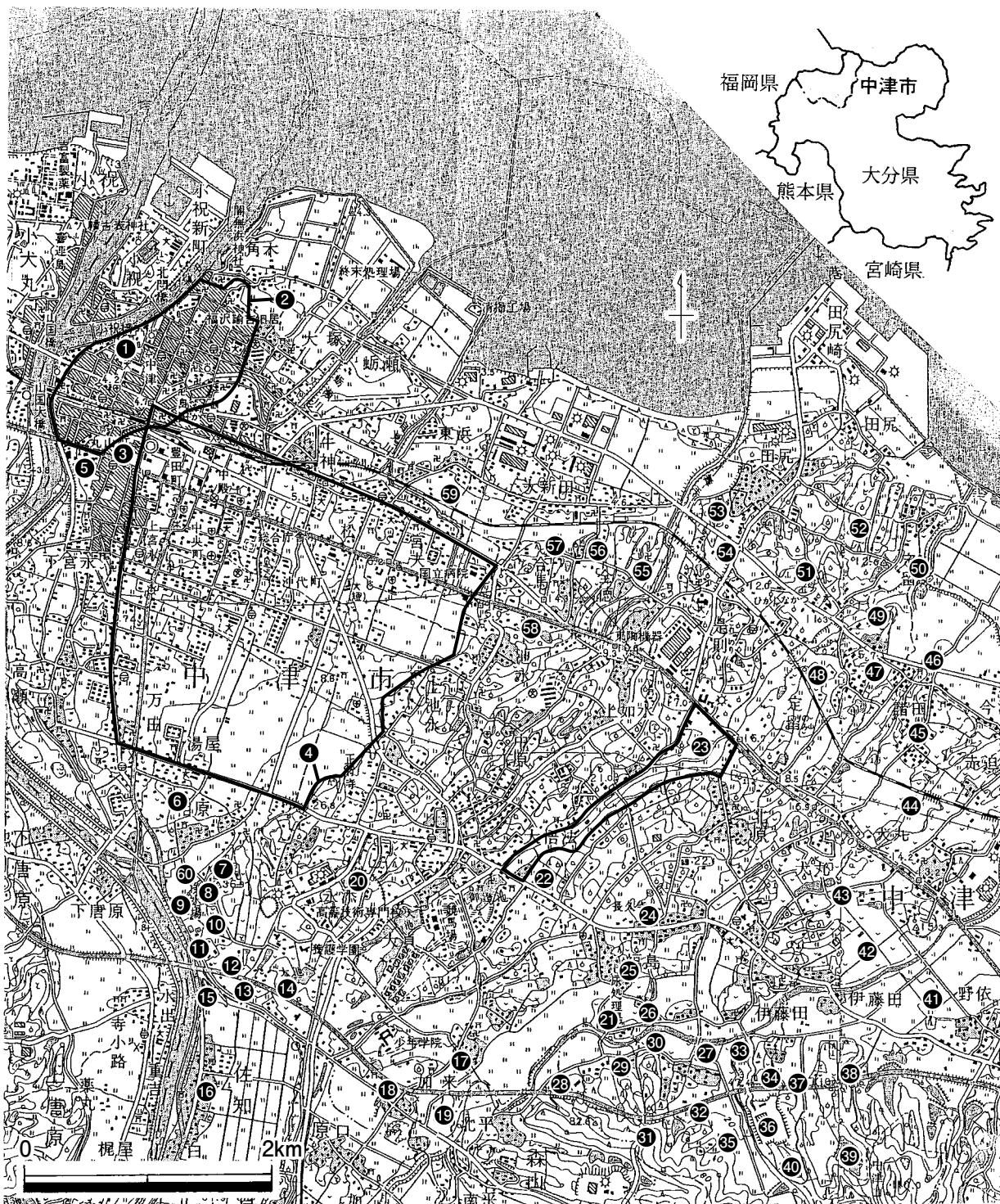
第2節 歴史的環境

縄文時代は上畠成遺跡（43）で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見されている。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚やボウガキ遺跡（21）、女体像と見られる土偶が出土した高畠遺跡（5）が挙げられる。法垣遺跡では複数の掘立柱建物が検出され注目されている（19）。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認される。続く中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡（28）で検出された。古墳時代の遺跡としては亀山（亀塚）古墳（58）が挙げられるが、明治時代に調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。5世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓群（11）が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群（29）、城山古墳群（34）、城山横穴墓群（33）などが見られる。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡（7）で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡（45）や定留遺跡（47）でまとまって発見されている。

古代には7世紀末に白鳳系の相原廃寺（6）が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制（4）が施行されたと考えられ、条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。8世紀後半には官道南側に下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡（20）が確認された。須恵器や瓦を製作した生産遺跡は、踊ヶ迫窯跡（38）、草場窯跡（37）、洞ノ上窯跡などがある。集落遺跡としては古墳時代から10世紀まで続き緑釉陶器や墨書き土器が出土した三口遺跡（60）がある。

中世は、長久寺の田丸城跡（24）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世は関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632（寛永9）年に完成を見る（2）。1717（享保2）年に奥平氏が入部し、1871（明治4）年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。



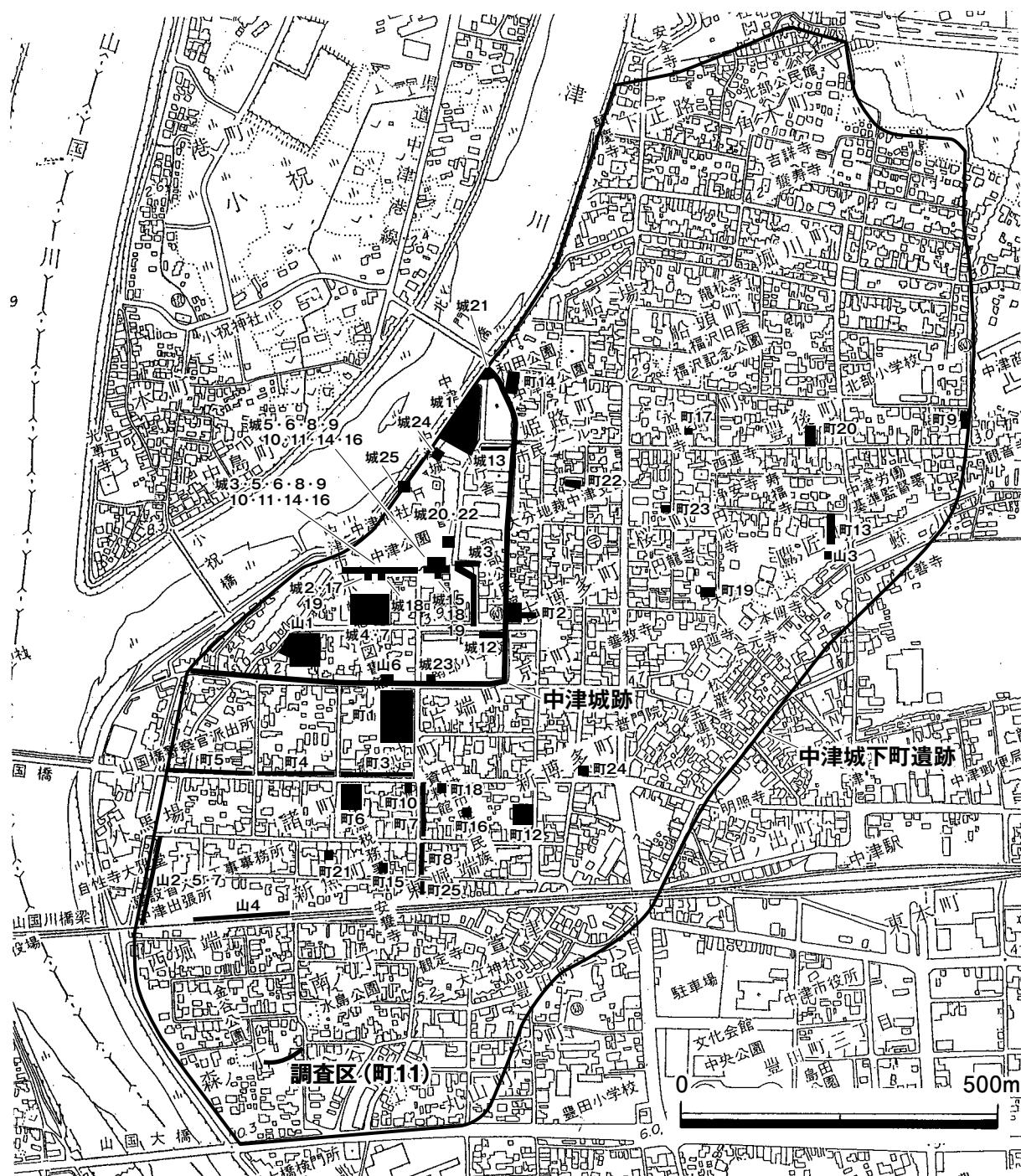
- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 和間貝塚 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ迫窯跡 | 50. 定留鬼塚遺跡 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畠遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 是能遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 田尻大迫遺跡 |
| 5. 高畠遺跡 | 17. 加来居屋敷遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 舞手稿東段上遺跡 |
| 6. 相原庵寺 | 18. 黒水遺跡 | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 是則遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 法垣遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 上畠成遺跡 | 55. 全徳遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 諸田南遺跡 | 56. ガラスノ遺跡 |
| 9. 坂手隈城跡 | 21. ボウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 諸田遺跡 | 57. 合馬遺跡 |
| 10. 幣旗邱古墳群 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 天貝川遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 定留遺跡 | 59. 東浜遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 田丸城跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 定留貝塚 | 60. 三口遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3節 これまでの調査（第2図）

中津城・中津城下町遺跡は、1989年からこれまで数十件発掘調査が行われている。その全てについて詳述することはしないが、石垣整備に伴う確認調査が2001～2010年度に行われ、中津城の石垣が九州の近世城郭の中で現存する最古のものであることが判明している。また、1990年度調査（山1）にて城下の内堀・外堀に付随する土壙、通称「おかこい山」の調査が行われその構築方法の一端が解明された。1997～1999年度調査（町3～5）の県道拡幅に伴う調査では、屋敷の境界をなす溝、江戸時代の水道施設「御水道」や多数の陶磁器が出土し当時の生活を知る資料が得られた。

今回の調査地周辺は、かつて下級武家屋敷が立ち並んでいた地域で、中津城外堀の外辺に位置する。往時の名残は狭い路地などに見ることができる。



第2図 今回調査区及び周辺主要調査位置図 (S=1/10,000)

第1～3表は、これまでに中津城跡、中津城下町遺跡、中津城おかこい山で行った調査一覧である。これまで各遺跡の調査報告は、遺跡名、調査地の町名、過去に城下に存在した武家屋敷名などを冠してなされてきた。しかし、同じ町名内での調査数が増加してきたことから、過去の調査から順次調査番号を振り、将来の発掘調査もそれに続けることになった。ただし、過去に実施したすべての調査に番号を振ることはせず、近世以前の遺構を検出した発掘調査、測量調査のみに番号を振っている。

第1表 中津城跡主要調査一覧表(位置図表示=城○)

番号	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	調査内容		深さcm (遺構面まで)	調査原因	報告書
				遺構・遺物	時代			
1	中津市 1257 番地の 16	500	1993/2/1～3/26	石垣・堀・井戸	近世・近現代	40	官庁建設	1993「中津城跡(二の丸)」 中津市教委第12集
2	中津市 1279		2000/7/17～7/26	石垣	中近世	—	確認調査	
3	中津市 1260、1282、1278-1、1279-9	814	2001/11/1～2002/3/29	石列・櫓跡・石垣		—	水路改修・確認調査	2002「中津城本丸南西石垣」 中津市教委第27集
4	中津市 1290 他	276	2002/10/11～2003/3/13	土坑	近世	70	美術館建設	
5	中津市 1278-1	200	2002/4/8～2003/3/31	石垣・櫓台跡	近世	160?	石垣修理	2003「中津城本丸南西石垣II」 中津市教委第30集
6	中津市 1278-1	465	2002/10/1～2003/3/28	石垣・建物跡	近世	—	保存整備	2003「中津城本丸南西石垣II」 中津市教委第30集
7	中津市 1290 他	1101	2003/4/7～9/22	土坑・御水道	近世	70?	芸術文化センター建設	
8	中津市 1278-1 他	700	2003/4/1～2004/3/30	石垣裏込・堀の底の確認	中近世	—	石垣修理	2004「中津城本丸南西石垣III」 中津市教委第34集
9	中津市 1278-1	600	2003/8/4～2004/3/30	豪族居館の一 部・石垣	中世末	?	保存整備	2004「中津城本丸南西石垣III」 中津市教委第34集
10	中津市 1278-1	580	2004/7/1～2005/3/31	居館・石垣	中近世	300	保存整備	2005「中津城本丸南西石垣IV」 中津市教委第37集
11	中津市 1278-1 他	510	2004/7/～2005/3/31	石垣	近世	—	石垣修理	2005「中津城本丸南西石垣IV」 中津市教委第37集
12	中津市 1309	112.5	2004/11/5～2005/2/17	建物・礎石・ 土坑	近世	—	保存整備	
13	中津市 1257-12	188	2005/11/16～11/17	柱穴	近世	130?	フェンス改 良工事	
14	中津市 1278-1 他	2170	2005/6/1～2006/3/31	石列・礎石	中近世	—	保存整備	2006「中津城本丸南西石垣V」 中津市教委第41集
15	中津市 1278-1 他	900	2005/4/1～2006/3/31	石垣	?	—	石垣修理	
16	中津市 1279 他	700	2006/4/1～2007/3/30	石垣	江戸	—	石垣修理	
17	中津市 1278-1 他	250	2006/6/1～2007/3/30	石列・堀	江戸	30～100?	保存整備	2007「中津城本丸南西石垣VI」 中津市教委第42集
18	中津市 1279 他	350	2007/4/2～2008/3/31	石垣・堀	江戸	—	石垣修理	
19	中津市 1278-1 他	300	2007/6/1～2008/3/31	堀・瓦	江戸	100?	保存整備	2008「中津城本丸南西石垣VII」 中津市教委第45集
20	中津市 1278 他	580	2008/4/1～2009/3/31	堀・石垣	江戸	—	保存整備	
21	中津市 1235-2	30	2010/5/24～8/31	石垣	陶磁器・瓦(近 世)	150	県道拡幅	2011「中津城跡VIII」 中津市教委第54集
22	中津市 1278-1	100	2010/11/1～2/28	石垣	なし	—	保存整備	2011「中津城跡VIII」 中津市教委第54集
23	中津市 1309 番地	20	2012/9/21～10/24	おかこい山石 積み	木製品	140	プール建設	
24	中津市 1257-6 他	90	2013/8/22～9/13	柱穴・土坑	中世	100	スロープ建 設	
25	中津市 1272-1、 1273-3		2013/12/10～2014/1/31	石垣・溝・階 段	近世	—	保存整備	2014「中津城跡 25 次調査」 中津市教委第70集

第2表 中津城下町遺跡主要調査一覧表（位置図表示=町○）

番号	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	調査内容		深さ cm (遺構面まで)	調査原因	報告書
				遺構・遺物	時代			
1	中津市 1366-1	1700	1991/12/15 ~ 1992/2/20	溝・土坑・近世陶磁器・瓦	近世	70 ~ 80 ?	図書館建設	1992「藩校進脩館跡」中津市教委第 11 集
2	中津市 1468	1571	1993/2/1 ~ 3/31、1994/7/14 ~ 1995/3/31	石垣・石列・土坑、土師器・陶磁器・木製品・瓦	17世紀・18世紀	70 ~ 80 ?	公民館建設	1998「御用屋敷遺跡」中津市教委第 21 集
3	中津市 1385 他	800	1997/8/20 ~ 98/3/20	柱穴・溝・井戸・土壤	17 ~ 19世紀	80	県道改良	2004「中津城下町遺跡殿町地区」中津市教委第 32 集
4	中津市 1393 他	4080	1998/6/1 ~ 99/3/19	柱穴・溝・井戸・土坑	近世陶磁器・土師器・瓦	80	県道拡幅	2004「中津城下町遺跡殿町地区」中津市教委第 32 集
5	中津市 1405 他	2080	1999/8/1 ~ 12/22	土坑・柱穴・石列・溝	近世陶磁器・土器・瓦・銅製品	100 ~ 150	県道拡幅	2004「中津城下町遺跡殿町地区」中津市教委第 32 集
6	中津市 1424	810	2002/9/4 ~ 9/11	土坑群・井戸	近世	100 ?	病院建設	2004「中津城下町遺跡殿町奥平孫次郎屋敷跡」中津市教委第 33 集
7	中津市 1433-1 他	1140	2003/10/1 ~ 2004/2/18	廐棄土坑・御水道	近世	100 ?	市道拡幅	
8	中津市 1843 他	360	2004/6/1 ~ 10/15	土坑・石列・井戸	近世	100 ?	道路拡幅	
9	中津市 828-2 他	5	2007/1/11	外掘?	不明	200	集合住宅建設	
10	中津市 1431-1	8	2007/1/18	城下町	江戸	80 ?	医療施設建設	
11	中津市 2196-2 他	160	2008/5/1 ~ 5/21	土坑・石列	近世	50 ~ 70	市道新設	2014「中津城下町遺跡 11 次調査」中津市教委第 68 集、本報告
12	中津市 1441-2	130	2009/10/20 ~ 11/2	土坑・井戸	近世	100 ?	市営住宅建設	
13	中津市 904-3 他	70	2009/8/31 ~ 9/10	土坑・井戸	近世	100	市道拡幅	
14	中津市 575	1260	2009/9/9・2010/3/31	井戸・溝状遺構	近世	25	確認調査	2010「中津城下町遺跡竹下義兵衛屋敷跡」中津市教委第 51 集
15	中津市 1888 番地 5	75	2010/10/6 ~ 11/4	土坑・井戸・溝	陶磁器	120	リハビリ施設建設	2012「中津城下町遺跡新魚町地区」中津市教委第 55 集
16	中津市 1437-2 他	5	2010/12/8	土坑	時期不明	100	倉庫建設	
17	中津市 1005 番地	40	2012/8/6 ~ 8/17	土坑	陶磁器(18 ~ 19C)	50 ?	個人住宅建設	
18	中津市 1436 番地他	163	2012/8/16 ~ 11/30	土坑・井戸・溝	陶磁器(17C ~)	100 ?	保育園建て替え	2014「中津城下町遺跡第 18 次調査」中津市教委第 69 集
19	中津市 987 番地	130	2012/11/12 ~ 12/25	土坑・溝	陶磁器(17 ~ 19C)	70 ~ 80 ?	福祉施設建設	2014「中津城下町遺跡寺町地区」中津市教委第 65 集
20	中津市 801	20	2012/12/19	溝状遺構・土坑	近世	200 ?	戸建賃貸住宅建設	
21	中津市 1828	5	2013/3/11 ~ 現在	石敷・礎石	陶磁器(18 C 以降)	10	公共建物	
22	中津市 1178 番地	29	2013/4/23 ~ 4/25	土坑	陶磁器(18C 後半 ~ 19C)	100 ?	個人住宅建設	
23	中津市 1094 番地	40	2013/4/30 ~ 5/2	土坑	陶磁器(18C 以降)	140	個人住宅建設	
24	中津市 1720 番 1 他	30	2014/2/13 (試掘)	土坑・溝	陶磁器(18C 以降)	120	集合住宅建設	
25	中津市 1930 番地他	40	2014/2/14 (試掘)	土坑	陶磁器(18C 以降)	50 ~ 100	集合住宅建設	

第3表 中津城おかこい山主要調査一覧表（位置図表示=山○）

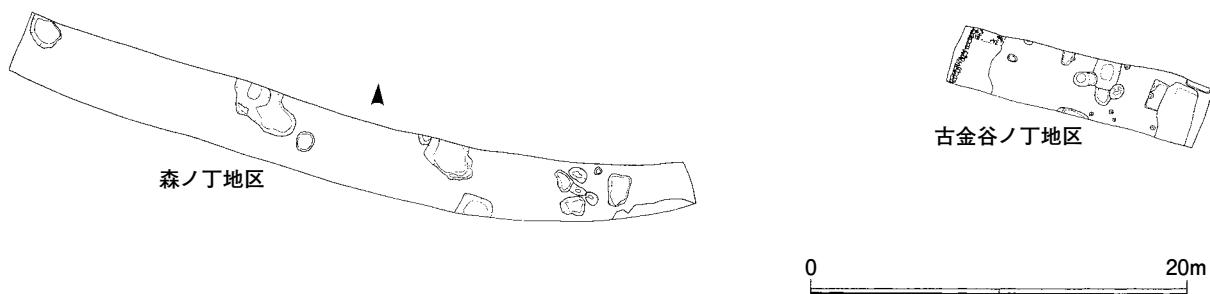
番号	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	調査内容		深さ cm (遺構面まで)	調査原因	報告書
				遺構・遺物	時代			
1	中津市 1300-1	2700	1989/2/27 ~ 4/9	土壘・瓦・近世陶磁器	近世	露出	マンション建設	1990「おかこい山」中津市教委第 9 集
2	中津市 1904-1 他	3000	2007/2/7 ~ 3/30	土壘	江戸	40 ~ 100 ?	保存整備	2007「中津城VI」中津市教委第 42 集
3	中津市 904	200	2007/9/19 ~ 10/5	土壘	江戸	150 ?	保存整備	2008「中津城VII」中津市教委第 45 集
4	中津市 1909 番 10 他	—	2010/3月	土壘	—	—	保存整備	
5	中津市 1904 番地 1	—	2011/1/6 ~ 2/2	土壘	須恵器・瓦質土器	50 ~ 100	保存整備	2011「中津城VIII」中津市教委第 54 集
6	中津市 1312	—	2012/2/1 ~ 2/24	土壘	—	—	保存整備	2012「中津城IX」中津市教委第 56 集
7	中津市 1904 番地 1	200	2013/7/17 ~ 9/27	土壘	陶磁器等	70 ~ 100	水路改修	

第3章 調査の方法と成果

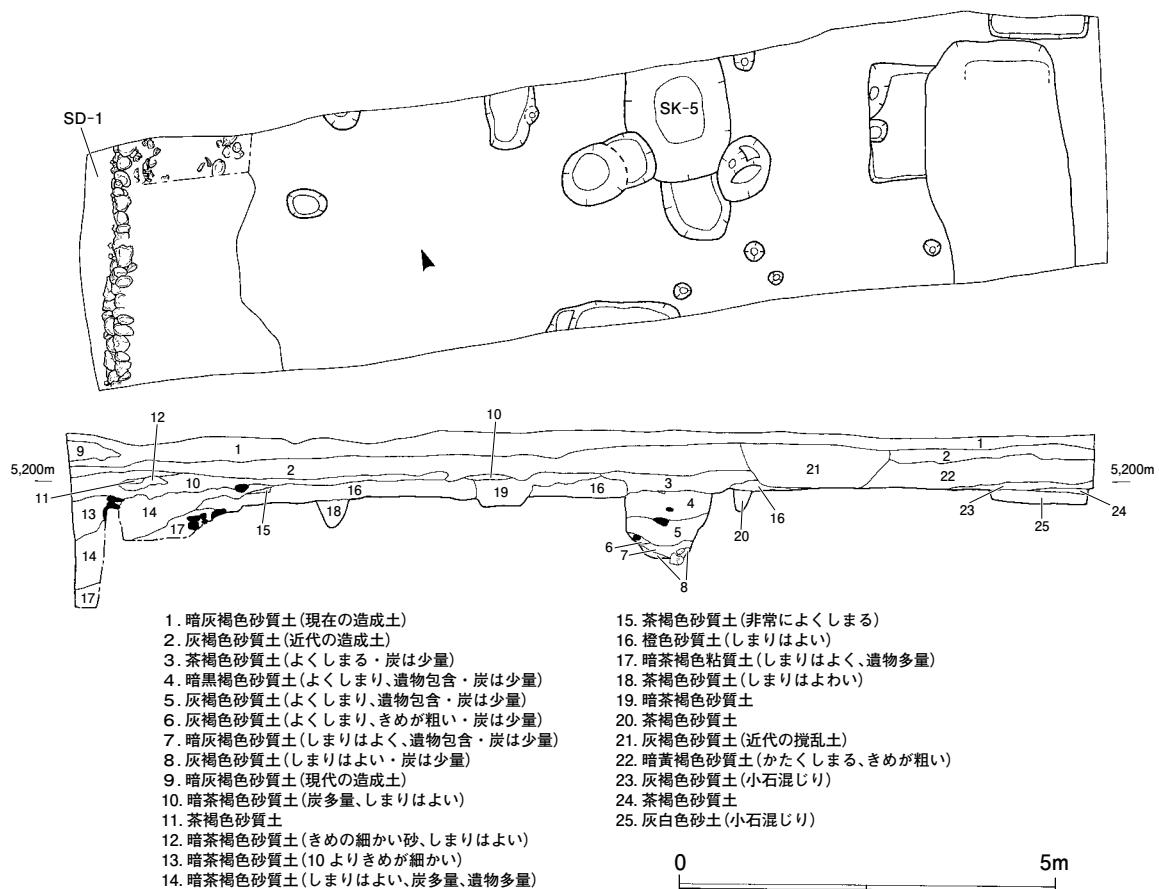
第1節 調査の方法

調査地は、江戸時代後期の絵図によると古金谷ノ丁・森ノ丁地区にまたがる。両地区の調査面積は約160m²である。周辺では、調査地から南に200mの位置に縄文時代晚期の土偶や5世紀代の竪穴式住居等が出土した高畠遺跡（大分県立中津南高校所在）が存在する。このため、旧城下町に由来する近世遺構も含め、前代の遺構・遺物の発見も想定して調査にあたった。

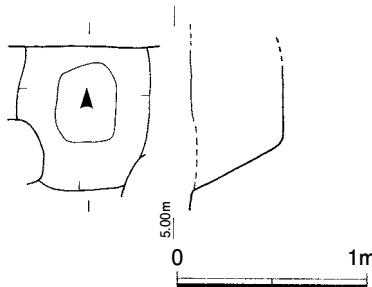
調査は、調査区を古金谷ノ丁地区と森ノ丁地区に分けて行った。森ノ丁地区から調査に着手し、順次古金谷ノ丁地区に移行した。表土剥ぎは重機を使用し、遺構の掘削は基本的に半截法を採用した。



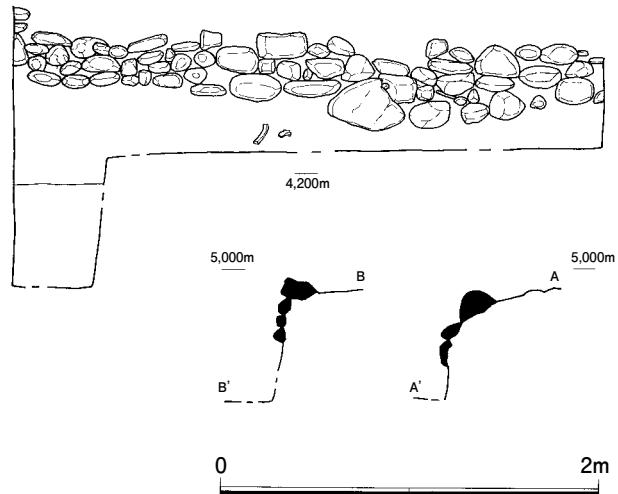
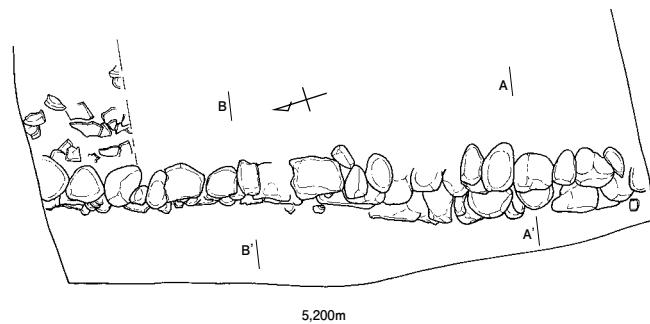
第3図 遺構配置図 (S=1/400)



第4図 古金谷ノ丁地区遺構配置図、調査区北壁土層図 (S=1/100)



第5図 SK-5 平面図・断面図 (S=1/40)



第6図 SD-1 平面図・立面図・断面図 (S=1/40)

第2節 調査の成果

(1) 層序 (第4図)

基本層序を第4図で概説する。1層は現在の造成土、2層は近代の造成土である。遺構はこれより30cm下位にて検出したが、土層断面によると、SK-5は2層直下から構築されている。このため、実際は2層付近で遺構検出が可能であったが、2層遺構埋土と上位堆積土の土色に明確な差異がなく、2層以下の層を

30cm掘り進み到達した黄褐色層にて遺構検出を行った。この黄褐色層はいわゆる地山ではなく、遺物を少量ながら包含していた。よって、この層より下位に遺構検出可能な面が存在する可能性を示していたが、調査日数の制限により今回の調査では確認できなかった。

遺物の数量は両地区合わせてパンケース14箱分であった。以下、図化可能な遺物の出土を見た遺構を中心に古金谷ノ丁地区から説明する。

(2) 遺構と遺物 (第3～19図)

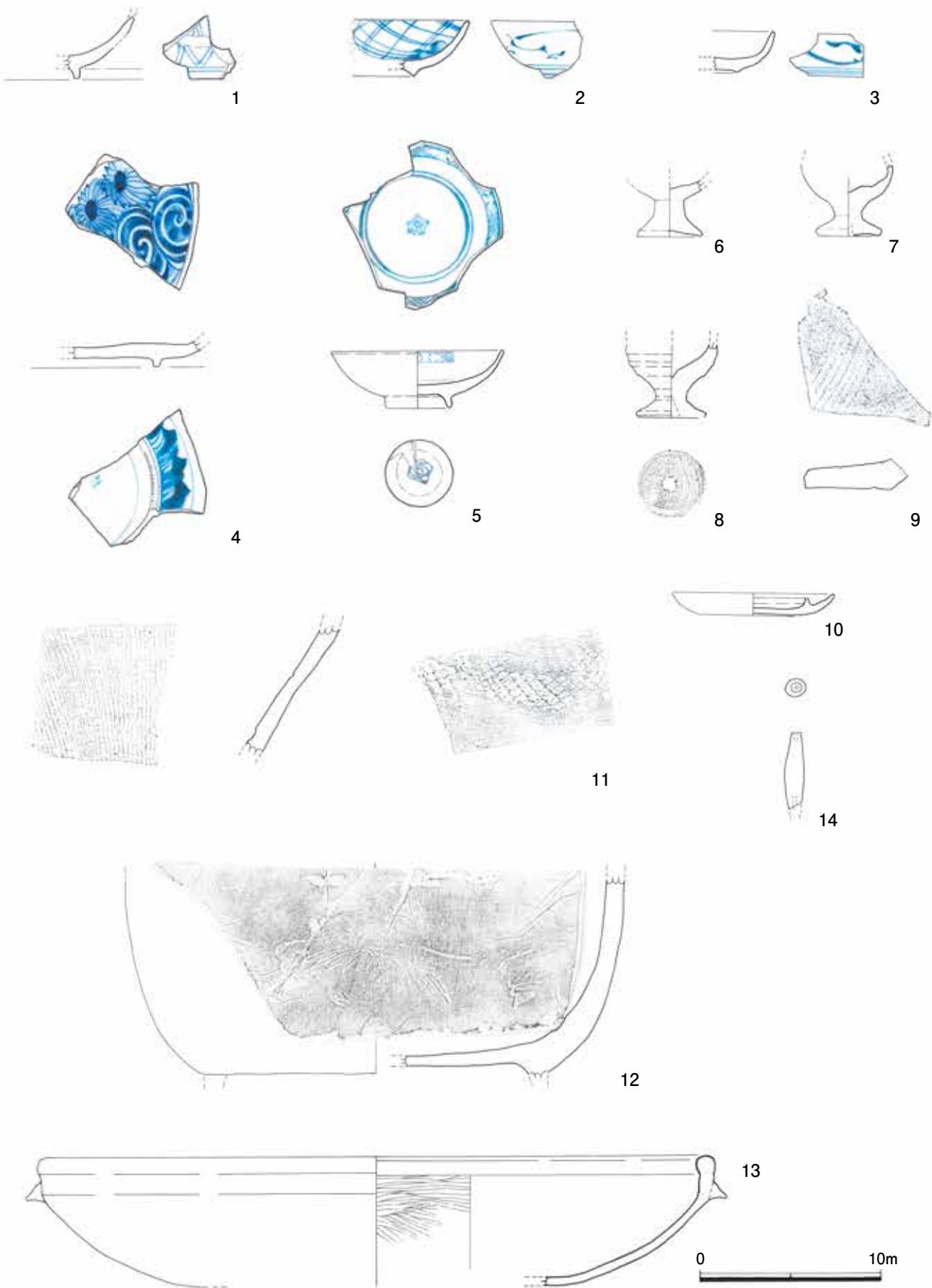
1) 古金谷ノ丁地区 (第4図)

当地区では調査区のほぼ全面から遺構を検出した。検出した遺構は、土坑10基、溝状遺構1条、複数の柱穴状遺構である。遺物の時期は、18世紀後半以降のものが大半を占める。19世紀後半や近代の遺構は調査区東端にて検出した。

土坑

SK-5 (第5・7・8図)

調査区中央に位置する。最大長76cm、最大幅72cm、深さ48cmを測り楕円形を呈する。南端部は他の土坑と重複する。1～6は肥前系磁器で、1は碗。2～5は皿で18世紀後半～19世紀前半の所産。2は蛇ノ目凹型高台。5は見込みに五弁花を描く。6は仏飯器。18世紀～19世紀の所産。7～12は陶器で、7・8は関西系灯火具。18世紀後半～19世紀前半の所産。9は堺産擂鉢。10は関西系



第7図 SK-5 出土遺物 (S=1/3)



第8図 SD-1、北壁、調査区内出土遺物 (S=1/3、1/1)

灯明皿。18世紀後半～19世紀前半代。11は産地不明の擂鉢。外面に格子目叩き痕が残る。12は焜炉で胴部外面に植物文を描く。13・14は瓦質土器で、13は高村産の焙烙。端部は丸く肥厚し、断面三角形状の突帯を張り付ける。内面は横方向磨きを施す。14は焼成の良好な土錘である。

SD-1 (第6・8図)

調査区西端に位置する。長さ3.2mを検出した。北端と南端は調査区外へ延びる。東側法面に大小の川原石を3段～4段法面に張り付けるように積み上げている。西側法面の状態は調査区外に及び不明である。溝は深さ60cmまで掘削したもの底面に至らず、石列の裏込め石は検出できなかった。第4図14・15・17層などは石列の裏に存在する層位で、層内に18世紀後半～19世紀前半代所産の遺物が含まれていた。本遺構はこの層形成後のものであることから、遺構の時期はそれ以降であることがわかる。

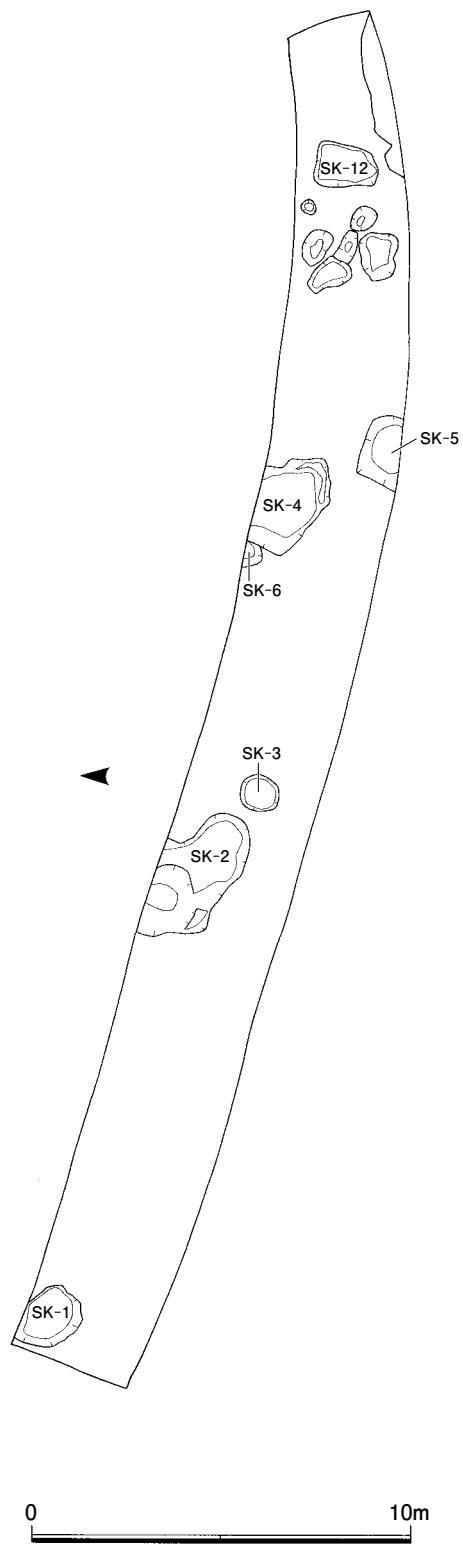
15～18は石列前面の溝埋土より出土した遺物。15は肥前系磁器皿。外面に植物文を描く。18世紀後半以降の所産。16～18は陶器で16は陶胎染付碗。17世紀末～18世紀前半の所産。17は堺産擂鉢。18世紀後半以降の所産。18は関西系の碗。18世紀後半～19世紀前半の所産。19～24は、14層・17層出土の磁器すべて18世紀後半～19世紀前半の所産。19は段重の蓋。20・21・24は皿で、20は内面に波雲文を描く。22は型打ち成形の鉢で、内面に渦文や植物文を描く。23は内面に五弁花を描く筒型碗。24は内面に菊花文を描く。

その他 (第8図)

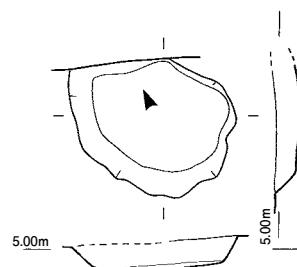
遺構検出面から少量の遺物が出土した。25は用途不明の三彩の陶器で、黄色地に竹・梅文を陽刻し、緑色に着色している。26は寛永通宝である。

2) 森ノ丁地区 (第9図)

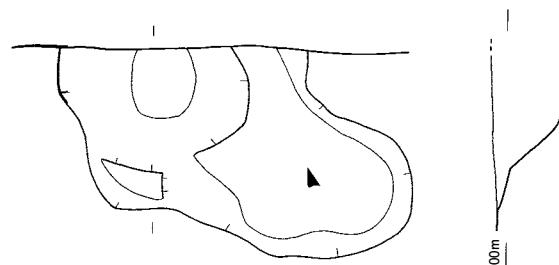
当地区では調査区内にまばらに遺構を検出した。やや東端の密度が高い。遺物の時期は、少量ながら17世紀前半代のものを含むが、その主体は18世紀後半以降である。検出した遺構は、土坑6基や複数の柱穴状遺構である。



第9図
森ノ丁地区遺構配置図 (S=1/200)

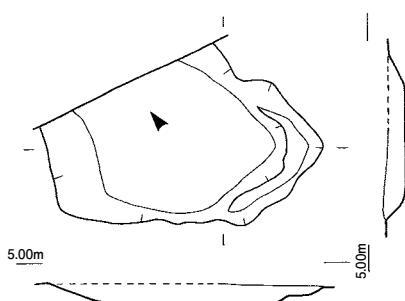


SK-1



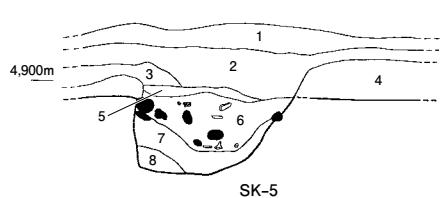
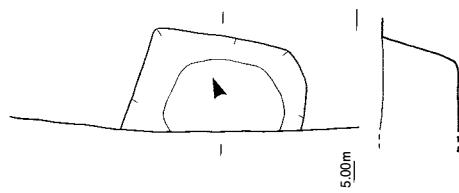
5.300m

SK-2



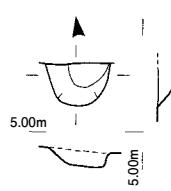
SK-4

1. 黒褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土 (SK-2 と異なる構造、平面では確認できず)
3. 黄褐色砂質土
4. 橙褐色砂質土 (地山)
5. 茶褐色砂質土 (よくしまり、遺物を含む、炭中量)
6. 暗茶褐色砂質土 (よくしまり、遺物を含む、炭中量)

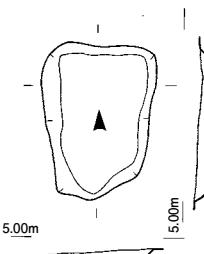


1. 暗褐色砂質土 (表土)
2. 1より明るい(炭を少量含む)
3. 茶褐色砂質土
4. 橙褐色砂質土
5. 3より固くしまる
6. 暗茶褐色砂質土 (しまりはよく、多量の遺物を含む)
7. 6より暗い
8. 暗橙色砂質土 (地山)

SK-5



SK-6



SK-12

0 2m

第10図 SK-1・2・4・5・6・12 平面図・断面図・土層図 (S=1/40)

SK-1 (第 10・11 図)

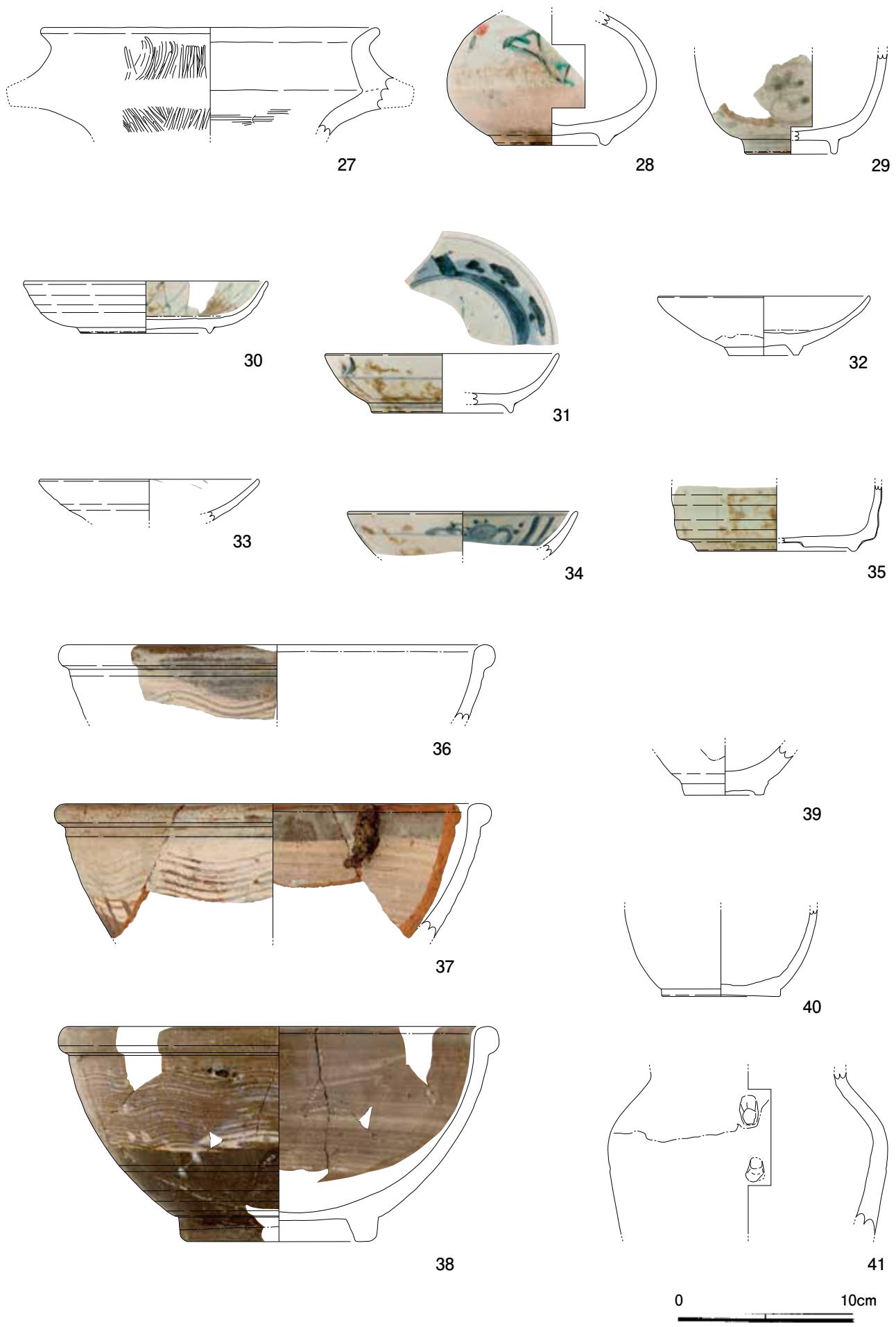
調査区西端に位置する。最大長 96cm、最大幅 72cm、深さ 16cm を測り歪な橢円形を呈する。遺物は多く出土している。27 は二重口縁の弥生土器の壺である。弥生時代後半～末頃の所産。28～36 は磁器で、28 は瓶。18 世紀代の所産。29 は碗。17 世紀後半～18 世紀前半の所産。30～34 は皿で 30 は内面に網目文を描く。18 世紀代の所産。31 は 18 世紀後半～19 世紀前半の所産。32 は 18 世紀代の所産。33 は 17 世紀末～18 世紀前半の所産。34 は 18 世紀後半～19 世紀前半の所産。35 は 18 世紀代の香炉である。36～47 は陶器で、36～38 は肥前系の鉢。外面は白色釉を波状、ハケ目状に施す。17 世紀末～18 世紀前半の所産。39 は 17 世紀前半所産の碗。40 は関西系の壺。18 世紀～19 世紀代の所産。42～46 は 18 世紀後半～19 世紀代を所産とする擂鉢。42・46 は堺産。47 は関西系の瓶。48 は種別不明の陶器。先端部はやや括れる 49 は土師質土器羽釜。50 は銅製のキセルである。

SK-2 (第 10・12～14 図)

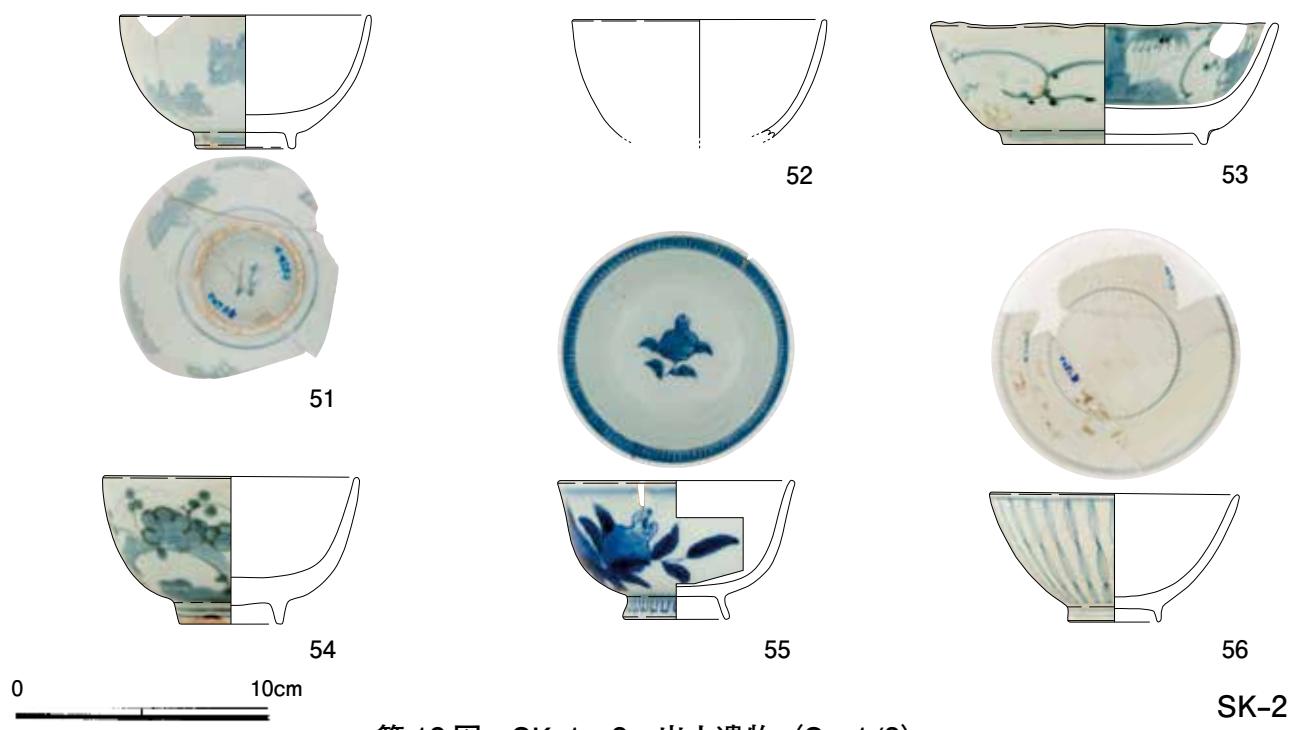
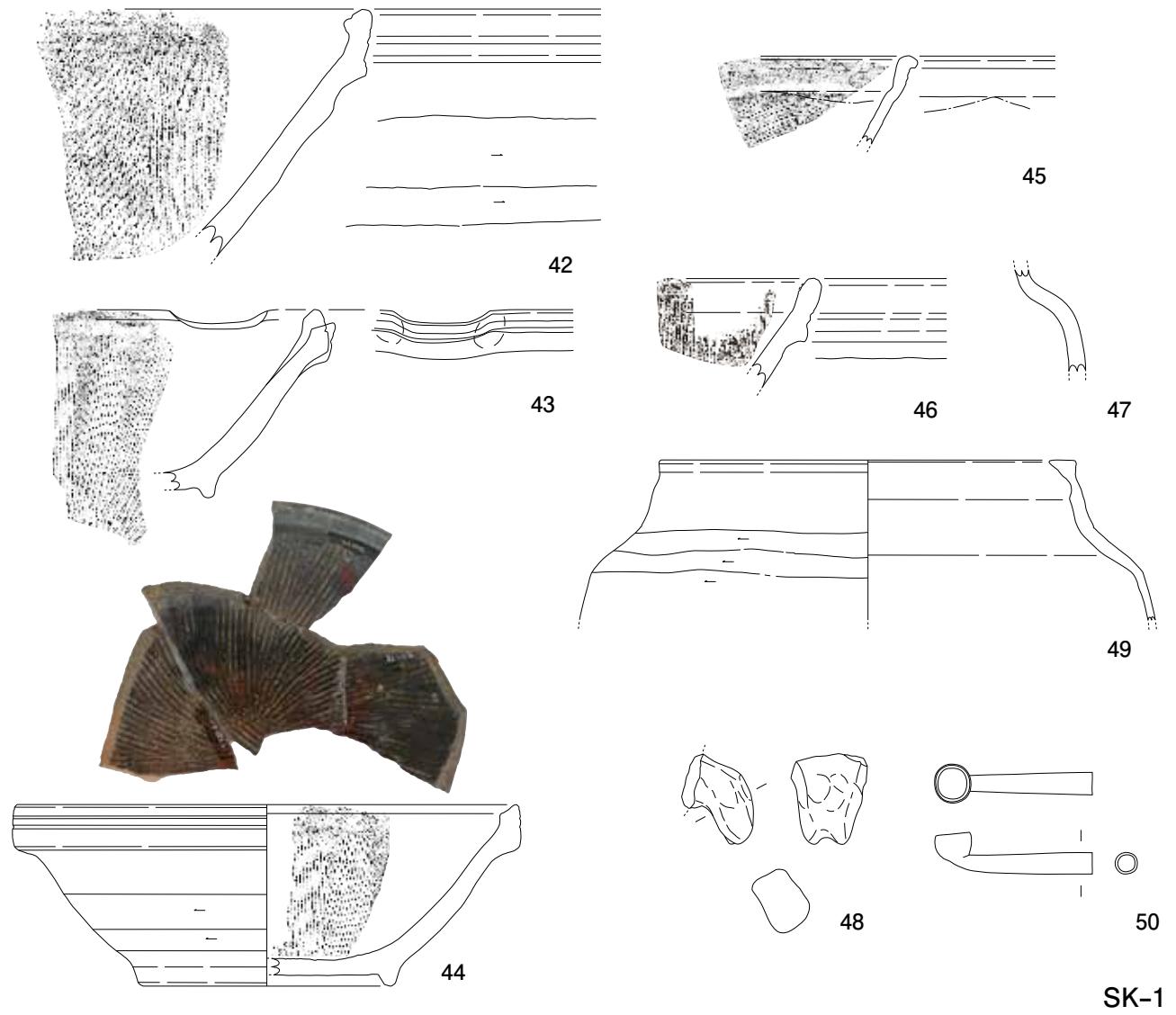
調査区中央西よりに位置する。最大長 200cm、最大幅 132cm、深さ 48cm を測り、歪な橢円形を呈する。底面から立ち上がりの間に一段テラスを有する。多く遺物が出土している。51 は 17 世紀末～18 世紀前半の所産で、外面にコンニャク印判を施す肥前系磁器碗。52 は肥前系白磁碗。53 は口縁端部が波状を呈する磁器碗。18 世紀後半所産。54 は肥前系碗でくらわんか手。18 世紀後半以降の所産。55 は瀬戸美濃産で外面の植物文に肉厚感がある碗。1810～1860 年頃の所産。56 は肥前系の小広東碗で、18 世紀後半の所産。57 は肥前系磁器皿で、高台に「奇玉宝鼎之珍」銘あり。18 世紀後半の所産。58・59 も肥前系磁器皿。60～70 は陶器で、60 は関西系燭台。18 世紀後半以降の所産。61 は関西系灯明受皿。62 は肥前系碗。18 世紀後半～19 世紀前半の所産。63 は肥前系陶胎染付碗。17 世紀後半の所産。64 は外面に鉄絵を施すくらわんか手の関西系碗。18 世紀後半～19 世紀前半の所産。65 は焼成不良の信楽系碗。18 世紀後半～19 世紀前半。66 は関西系の土瓶の蓋。18 世紀後半の所産。67 は萩産の蓋で、19 世紀前半～中頃の所産。68 は瀬戸美濃系の瓶。69 は産地不明の瓶。70 は堺産擂鉢。71 は土師器小皿。72 は土師器の灯明皿。73 は瓦質土器焜炉。18 世紀後半の所産。74 は高村産瓦質土器十能。18 世紀後半～19 世紀の所産。75 は高村産土師質土器焙烙。18 世紀後半～19 世紀の所産。76 は軒平瓦。植物文か。77 は軒丸瓦。巴文を施す。78 は石製の猿頭部。顔面と耳内に灰赤色の彩色、目に黒色の彩色あり。79 は硯である。

SK-4 (第 10・15・16 図)

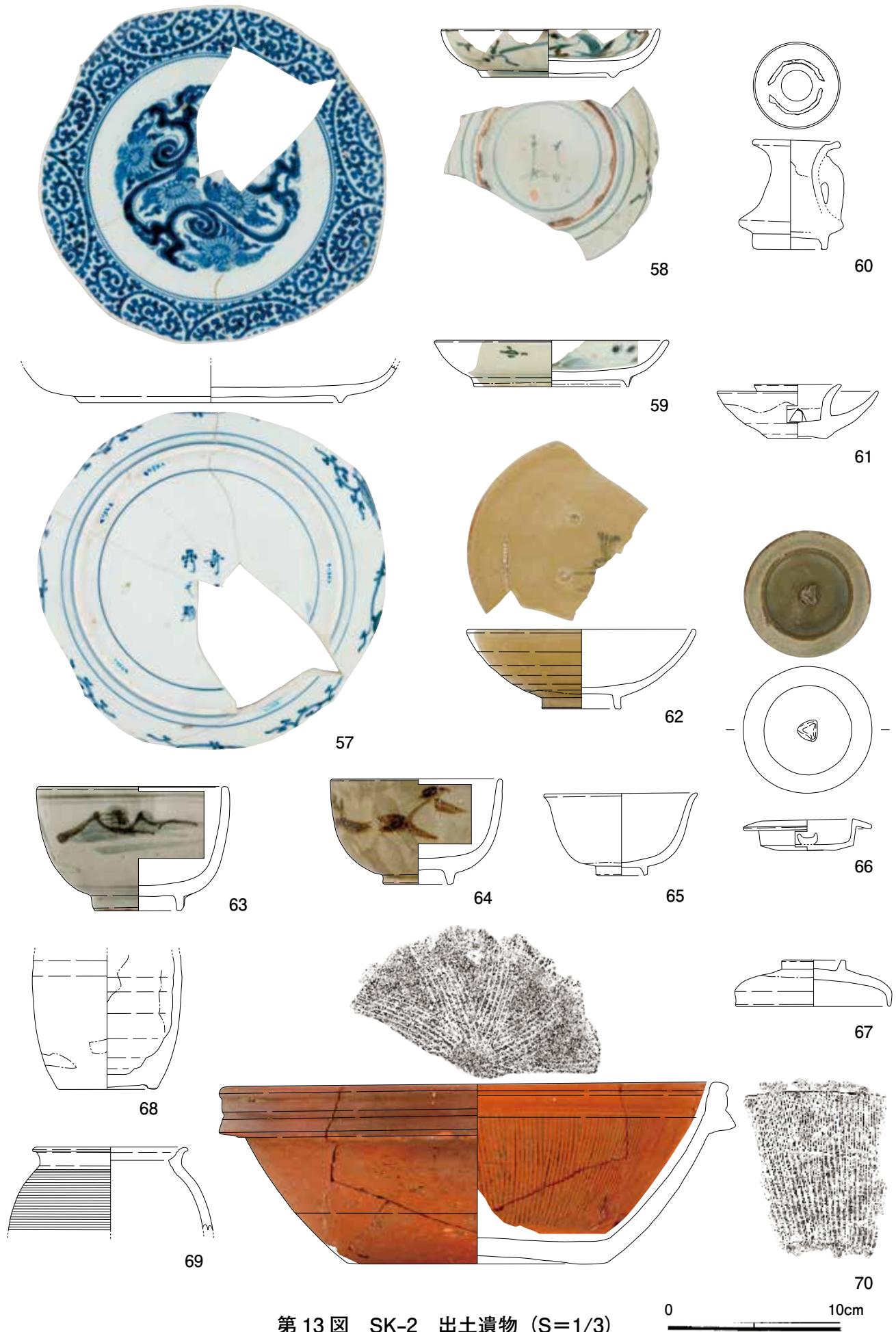
調査区中央東よりに位置する。最大長 148cm、最大幅 116cm、深さ 10cm を測り、歪な橢円形を呈する。底面から南東部立ち上がりの間に一段テラスを有する。遺物は多く出土している。80～90 は磁器で、81 は肥前系皿。18 世紀後半～19 世紀代の所産。紅皿として使用されたものか。82 は内外面に輪宝繩文を描く肥前系碗。18 世紀代の所産。82 は見込みに太陽文を施す肥前系碗。呉須の発色が悪く黒ずむ。18 世紀代の所産。83 は外面を亀甲状に区画する文様を描き、中を「井」状に描く肥前系碗。18 世紀後半以降の所産。84 は内面に太陽文を施す肥前系碗。18 世紀後半～19 世紀前半以降の所産。85～87 は肥前系の広東碗の蓋。1780～1810 年代の所産で 85 は外面に竹林賢人を描く。88 は肥前系の段重の蓋で 18 世紀後半～19 世紀代の所産。89 は肥前系の広東碗。90 は内面に山水を描く磁器皿。19 世紀前半～中頃の所産。91～97 は陶器。91 は蓋で見込みに摘みを有する。18 世紀後半～19 世紀代の所産。92 関西系の急須。18 世紀後半～19 世紀代の所産。93 は陶器瓶。94 は明緑色の透明釉を施す口縁部。95・96 は関西系の甕。18 世紀後半～19 世紀代の所産。97 は堺産擂鉢で、18 世紀



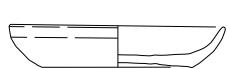
第 11 図 SK-1 出土遺物 (S=1/3)



第 12 図 SK-1・2 出土遺物 (S=1/3)



第13図 SK-2 出土遺物 (S=1/3)



71



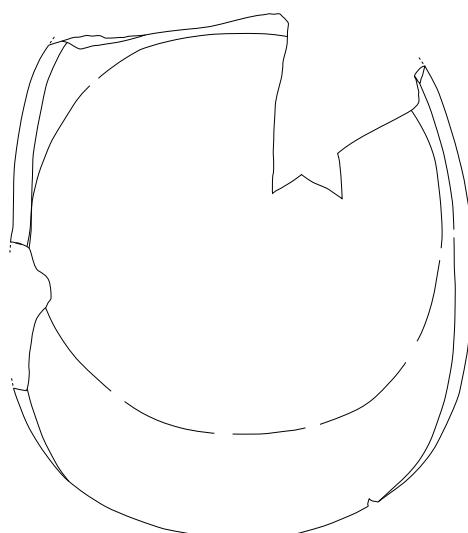
76



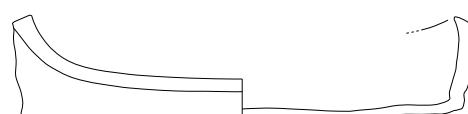
72



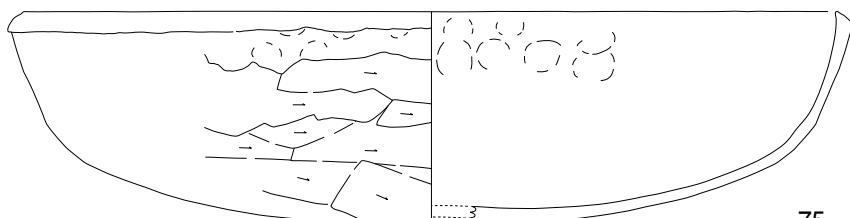
77



73



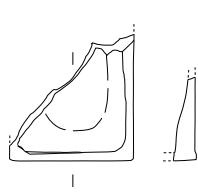
74



75



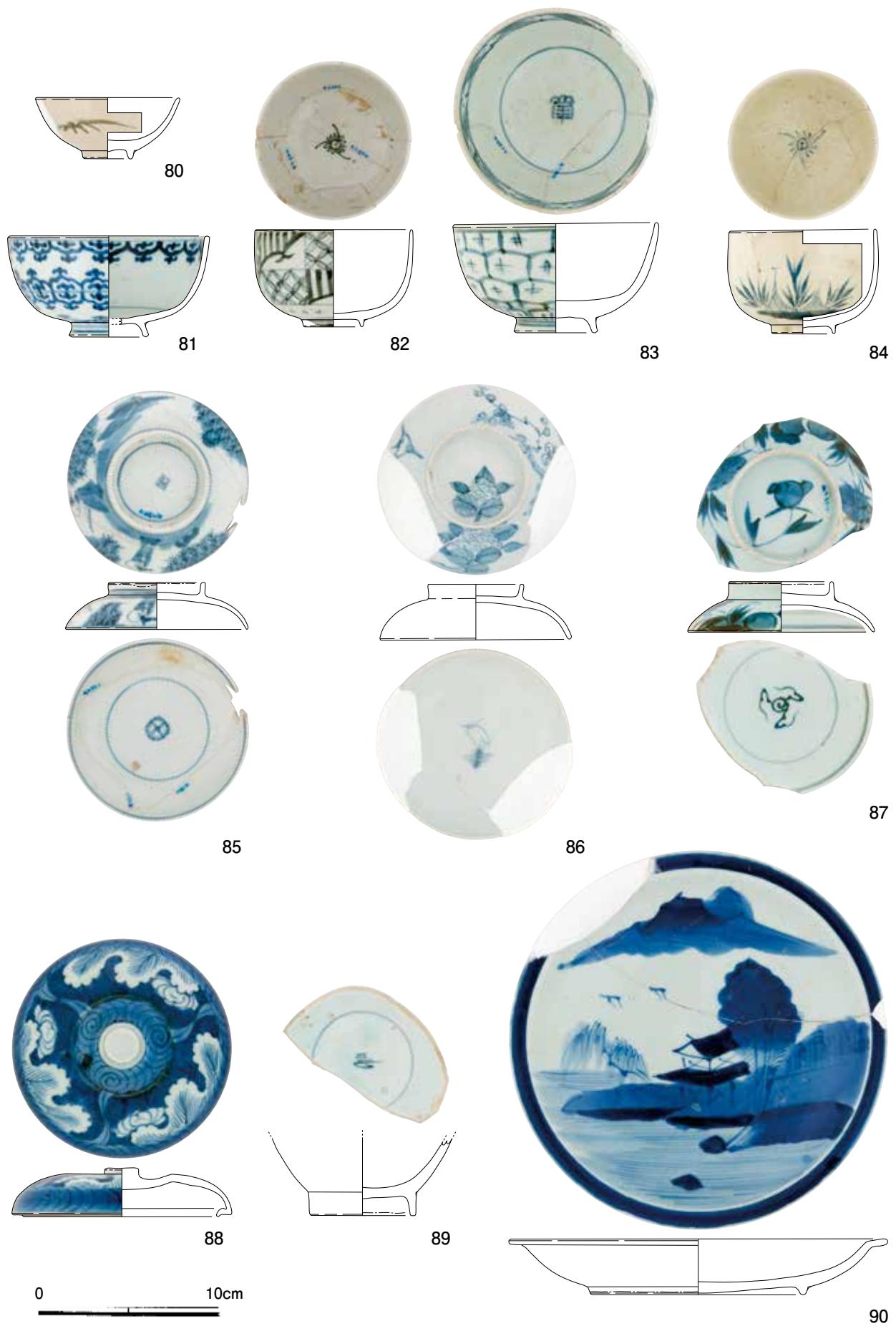
78



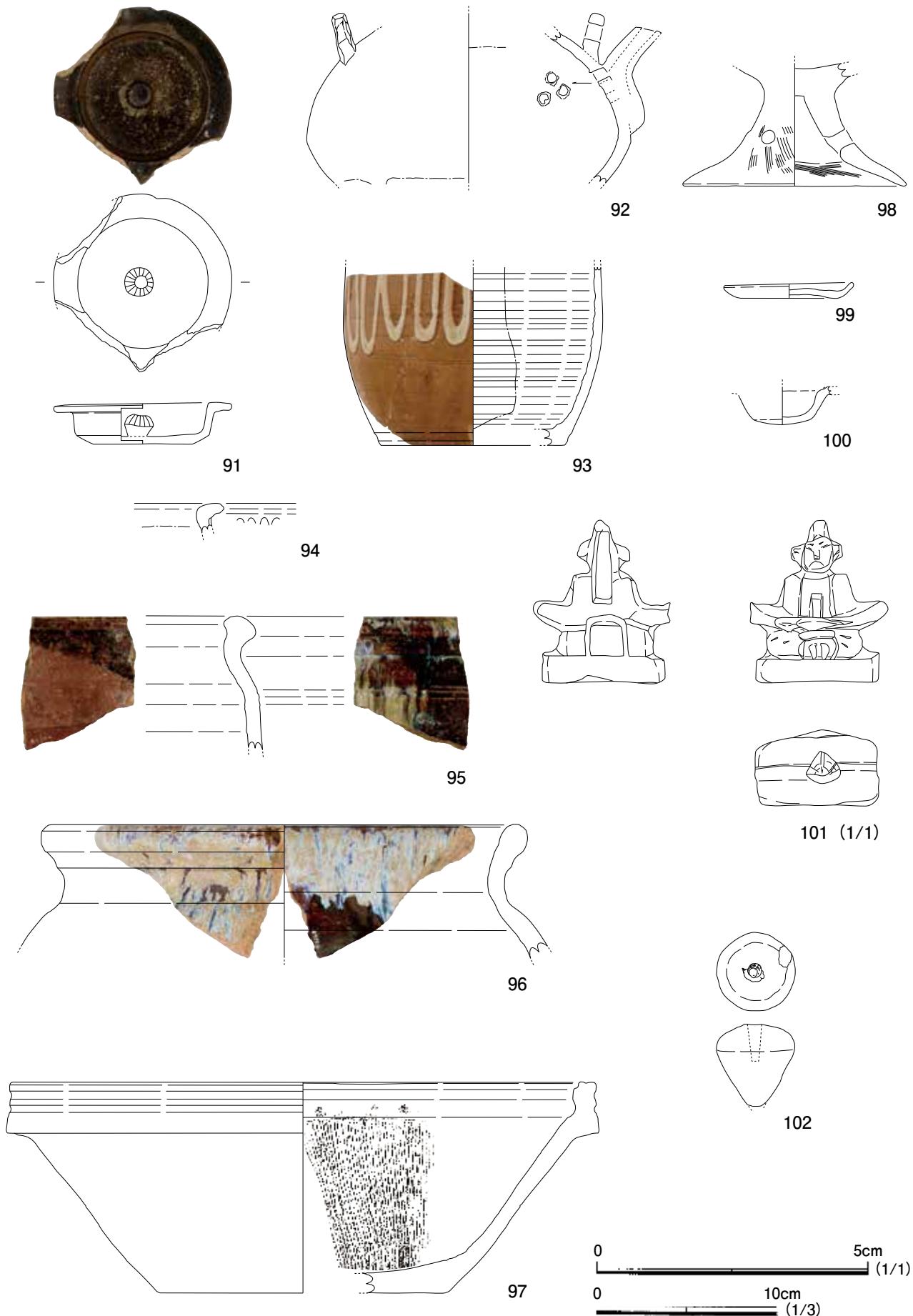
79

0 10cm

第14図 SK-2 出土遺物 (S=1/3)



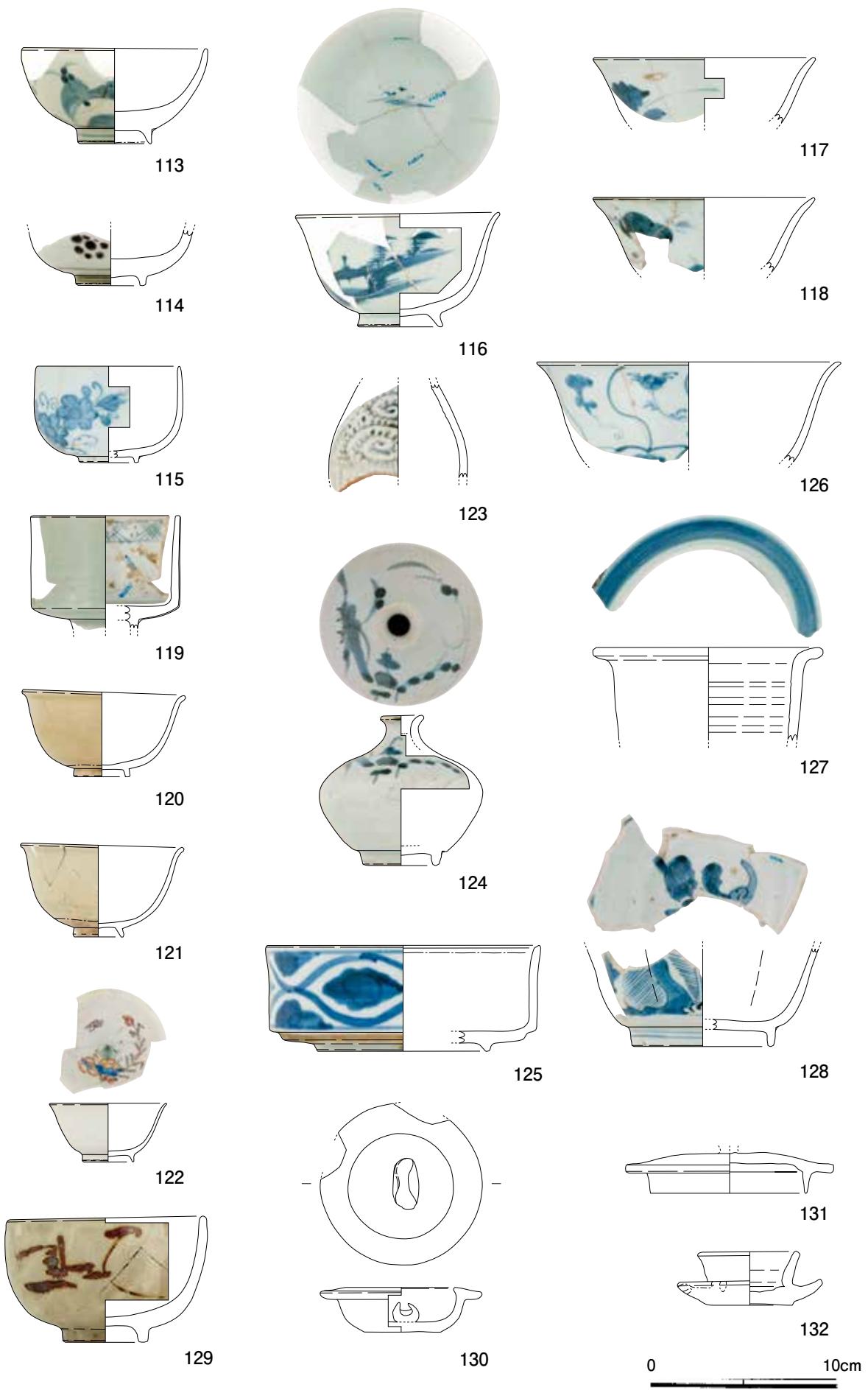
第15図 SK-4 出土遺物 (S=1/3)



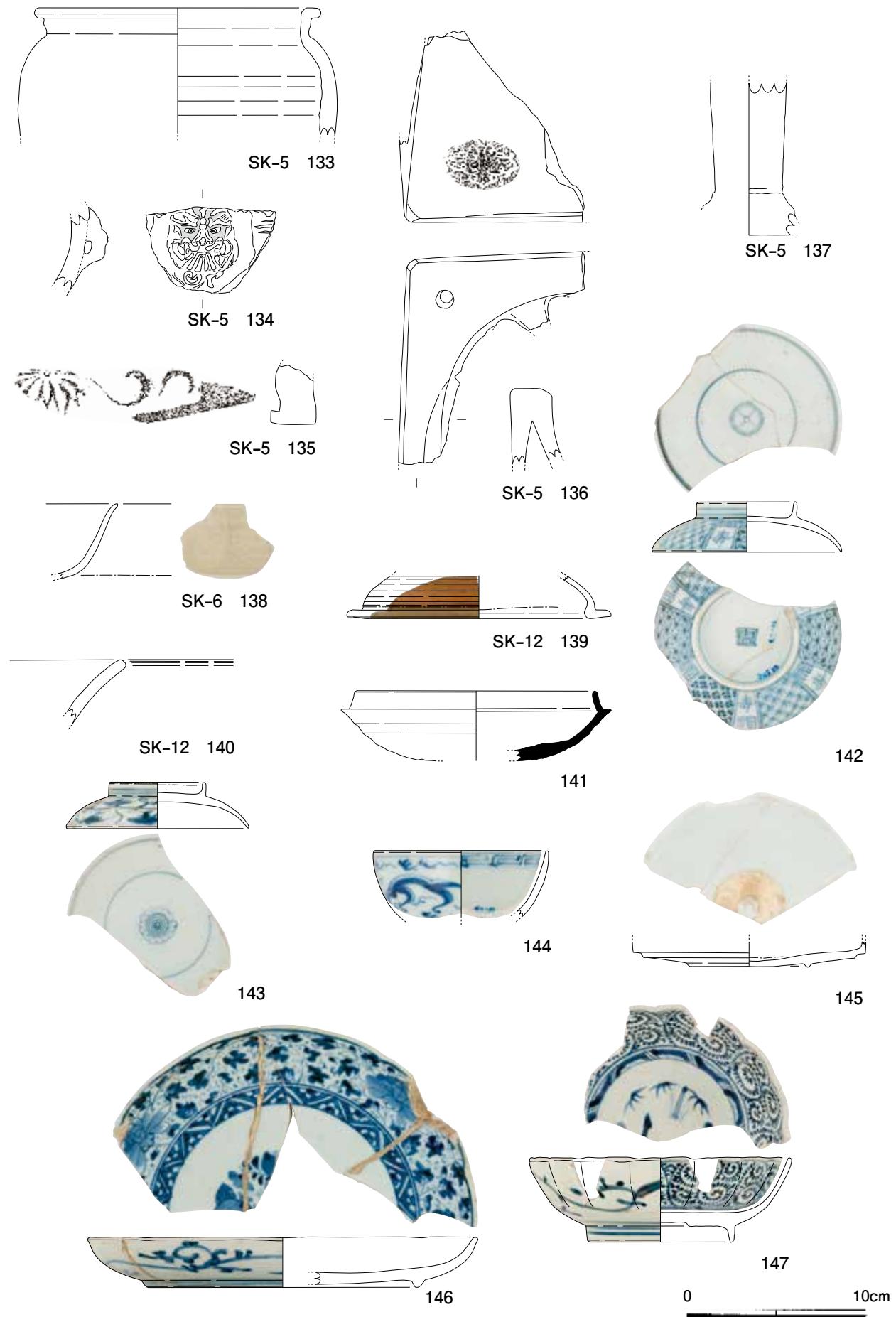
第 16 図 SK-4 出土遺物 (S=1/3, 1/1)



第 17 図 SK-5 出土遺物 (S=1/3)



第18図 SK-5 出土遺物 (S=1/3)



第19図 SK-5・6・12 調査区出土遺物 (S=1/3)

後半～19世紀代の所産。98～102は土師質土器で、98は穿孔のある古墳時代後期の高坏脚部。99は口径7.2cm、0.7～0.9cmを測る小皿。100は時期不明のミニチュア土器。101は土人形で底部に平面三角形状の抉りがある。102は断面形状逆三角錐状を呈する用途不明の瓦質土器で、上部に平面円形で貫通しない差し込み穴がある。

SK-5 (第10・17～19図)

調査区中央東よりに位置する。南辺は調査区外に延びる。最大長96cm、最大幅52cm+ α 、深さ48cmを測り、隅丸方形を呈する。埋土は6層と7層で6層から多量の遺物が出土した。103～105・107～128は磁器で、103～105は皿。105は内面に山水を描く。18世紀後半～19世紀代の所産。106～118は碗で、106は陶胎染付のくらわんか碗。17世紀後半～18世紀前半の所産。107・109は広東碗で、107は外面になずな文、109は「寿福」の文字がある。1780～1810年の所産。110は内面に「寿」の文字がある。18世紀後半～19世紀代の所産。112は肥前系で、18世紀後半の所産。113はくらわんか手。18世紀後半～19世紀代の所産。114は呉須の発色が悪く黒ずむ。18世紀後半の所産。115は波佐見焼。116は外面に山水を描く。117は口縁端部がわずかに外反する。18世紀後半～19世紀前半の所産。119は外面に青磁釉を施す筒型碗。18世紀後半～19世紀前半。120・121は信楽系の小碗で、18世紀後半～19世紀前半。122は関西系の小杯で、薄手酒盃。見込みに色絵を描く。19世紀前半の所産。123は外面にたこ唐草を描く徳利。18世紀後半～19世紀前半の所産。124は肥前系の油壺。18世紀後半～19世紀前半の所産。125は肥前系の段重。18世紀後半～19世紀前半の所産。126・127は肥前系の鉢で、外面になずな文を描く。18世紀後半からの所産。128は型打ち成形の鉢で、体部は八角になる。18世紀後半～19世紀代の所産。129～133は陶器。129は外面に鉄絵を描く陶胎染付碗。17世紀後半～18世紀前半の所産。130・131は関西系の土瓶の蓋。18世紀後半～19世紀前半の所産。132は燭台。133は関西系の陶器壺18世紀後半からの所産。134は瀬戸美濃系の火鉢の取手で、獣面を描く。18世紀後半からの所産。135は平瓦。中央に植物文を描く。136は瓦質土器焜炉の脚。137はトチン（窯道具）である。

SK-6 (第10・19図)

調査区中央東よりに位置する。SK-4に東辺を切られる。最大長32cm、最大幅20cm+ α 、深さ10.5cmを測る。遺物は少量出土した。138は信楽系の小碗で、18世紀後半～19世紀前半の所産。139は陶器で行平鍋の蓋。18世紀後半～19世紀前半の所産。

SK-12 (第10・19図)

調査区中央東に位置する。最大長80cm、最大幅60cm、深さ5cmを測る。遺物は少量出土した。140は土師器の甕。141は須恵器の坏身で、6世紀末～7世紀初頭の所産。

調査区内出土遺物（第19図）

その他表土剥ぎの段階で一定量の遺物が出土した。142～147は磁器で、142・143は広東碗の蓋。1780～1810年代の所産。142は外面に「寿福」の文字がある。143は外面になずな文を描く。144は丸碗で、18世紀後半所産。145は段重。18世紀後半～19世紀前半の所産。146・147は皿で147は内外面牡丹唐草を描く。18世紀後半からの所産。147は内面たこ唐草、外面松竹梅を描く。18世紀後半からの所産。

第4章 総 括

第1節 出土遺物について

当地区で検出した遺構の大半はほとんど土坑であり、出土遺物は18世紀後半～19世紀前半代の所産のものが大半を占める。一部17世紀前半や17世紀末のものも含まれるが伝世品と考える。陶磁器はくらわんか手や広東碗など大量生産された品が多く、優品はほとんど見ることができない。古い時代の遺物では、SK-5より弥生時代後期の二重口縁壺が、SK-12より6世紀末～7世紀初頭の須恵器や土師器が出土している。調査地周辺に該期の遺構が存在した可能性を示唆する。

第2節 遺構について

次に、今回検出した土坑と溝状遺構の性格について考える。幕末期作成の絵図を見ると今回調査地には、古金谷ノ丁地区に「岩田恭八」「火伏堂」が、森ノ丁地区には「中上川才蔵」とある。調査は、古金谷ノ丁地区はその大半を「火伏堂」とその西側の空白地に対して行い、森ノ丁地区では「中上川才蔵」屋敷の北側に対して行ったことになる。古金谷ノ丁地区では「火伏堂」付近で、18世紀後半代以降の遺物が出土するSK-5を検出し、その他に調査区東端で埋土が灰だけで構成された時期不明の土坑を検出したのみであった。SK-5は遺物の出土状況から廃棄土坑であろうが、それが「火伏堂」に関係するものかどうかは明確にできなかった。SD-1は、18世紀後半以降に構築された遺構で、川原石を2段ないし3段積み上げている。この遺構は、丁境に造られた背割水路と考える。背割水路は中津城下町の町境にも造られていることが多く、汚水・雨水などの排水溝であった。当該期の背割水路の形態を知るうえで貴重な成果となった。

森ノ丁地区では屋敷の礎石などは検出できず、18世紀後半代以降の土坑を検出するにとどまった。これらの土坑も遺物の出土状況から廃棄土坑と考える。

以上、中津城下町遺跡11次調査の発掘調査成果とその意義を述べ、総括とする。



第20図 中津城下絵図調査区周辺図

第4表 遺物観察表 1

No	遺構番号	器種・種別	法量			成形	装飾		製作地	製作年代	備考	図版No	
			口径	器高	底径		給付釉薬	文様					
1	SK-5	磁器碗					染付・透明釉	(外)二重網目文	肥前			7	
2	SK-5	磁器皿		3.1			染付・透明釉	(内)斜格子文	肥前	18C後半～19C前半		7	
3	SK-5	磁器皿		2.3		ロクロ	染付・透明釉	(外)植物文	肥前	18C後半～19C前半	蛇ノ目凹型高台	7	
4	SK-5	磁器皿				ロクロ	染付・透明釉	(内)植物文	肥前	18C後半～		7	
5	SK-5	磁器皿	(9.2)	3.2	3.4	ロクロ	青磁釉・透明釉	(見込)五弁花	肥前	18C後半～19世紀		7	
6	SK-5	磁器仏飯器			3.6	ロクロ	白磁釉		肥前	18C～19C		7	
7	SK-5	陶器灯火具			3.3	ロクロ	褐釉		関西系	18C後半～19C前半		7	
8	SK-5	陶器灯火具			3.7	ロクロ	胸部に灰オリーブ色を帯びた不透明釉。		関西系	18C後半～19C前半		7	
9	SK-5	陶器擂鉢	—	—	—	ロクロ	暗赤褐色		堺	18C後半～		7	
10	SK-5	陶器灯火具	8.6	1.2	5.1	ロクロ	鉄釉		関西系	18C後半～19C前半		7	
11	SK-5	陶器擂鉢	—	—	—	ロクロ	褐釉			不明	18C後半～	7	
12	SK-5	陶器焜炉				ロクロ	灰褐色	(外)植物文		不明	18C後半～	7	
13	SK-5	瓦質土器焙烙	(38.5)	7.0		ロクロ	暗褐色			高村	18C後半～		7
14	SK-5	瓦質土器鍤			4.2	手づくね	茶褐色					7	
15	SD-1	磁器皿	(8.4)	4.0	3.3	ロクロ	染付・透明釉	(外)植物文	肥前	18C後半～		8	
16	SD-1	陶器碗	(10.6)	6.5	4.7	ロクロ	染付・透明釉	陶胎染付	肥前	17C末～18C前半		8	
17	SD-1	陶器擂鉢				ロクロ	暗赤灰色		堺	18C後半～		8	
18	SD-1	陶器碗	(14.2)	5.0	4.7	ロクロ	褐釉			関西系	18C後半～19C前半	8	
19	北壁14層	磁器段重蓋	9.5/10.5			ロクロ	染付・透明釉	(外)植物文	肥前	18C後半～		8	
20	北壁14層	磁器皿	(15.1)	2.7	8.9	ロクロ	染付・透明釉	(内)波雲文 (見込)山水	肥前	18C後半～19C前半		8	
21	北壁14層	磁器皿	(12.9)	3.8	7.5	ロクロ	染付・透明釉	(外)内)植物文	肥前	18C後半～19C前半		8	
22	北壁14層	磁器鉢	(16.1)	5.9	8.7	型打ち	染付・透明釉	(外)不明 (内)渦文・植物文	肥前	18C後半～19C前半		8	
23	北壁14層	磁器筒型碗			4.0	ロクロ	褐釉?	(見込)五弁花	肥前	18C後半～19C前半		8	
24	北壁17層	磁器皿	12.8	2.9		ロクロ	染付・透明釉	(外)植物文 (内)菊花文	肥前	18C後半～19C前半		8	
25	検出面	陶器不明			3.4		三彩	(外)竹・梅文	不明	18C～19C		8	
26	一括	銅製品古錢	長2.2	重2.9								8	
27	SK-1	弥生土器壺	(19.40)	(6.20)	—		内にぶい橙7.5YR6/4 外にぶい褐7.5YR5/3					反転復元	
28	SK-1	磁器瓶	—	(7.50)	高台径6.60	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(外)色絵	肥前	18C～	腹部下位は還元不足で赤み残る一部反転	11	
29	SK-1	磁器碗	—	(5.70)	高台径(5.30)	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり 買入あり	(外)染付	肥前	17C末～18C前半	反転復元	11	
30	SK-1	磁器皿	(14.00)	3.00	高台径(7.50)	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内)網目文 (外)染付	肥前	18C～	一部反転	11	
31	SK-1	磁器皿	(13.40)	3.40	高台径(8.10)	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外)染付	肥前	18C後半～19C前半	反転復元	11	
32	SK-1	磁器皿	(12.20)	3.40	高台径(4.00)	ロクロ	わずかに水色みを帯びた透明釉 光沢あり	(内)染付	肥前	18C～	反転復元	11	
33	SK-1	磁器皿	12.60	2.35	—	ロクロ	灰白色を呈す 半透明釉 光沢あり		肥前	17C末～18C前半	内面の細線は染付文様か 反転復元	11	
34	SK-1	磁器皿	(13.20)	(2.50)	—	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外)染付	肥前	18C後半～19C前半	反転復元	11	
35	SK-1	磁器香炉	—	(4.30)	高台径(9.30)	ロクロ	明オーラー色を呈す半透明釉 光沢あり 一部に買入あり		肥前	18C～	反転復元	11	
36	SK-1	陶器鉢	(13.00)	(4.30)	—	ロクロ	内口縁付近は黒褐色釉それから下は白色釉のハケ目、後透明釉をかけたと思われるが風化で不明瞭 外 黒褐色釉の後白色釉を波状ハケ目状にかけ		肥前	17C末～18C前半	反転復元	11	
37	SK-1	陶器鉢	(25.00)	(7.70)	—	ロクロ	内口縁付近に黒褐色釉それから下は白色釉のハケ目、後に透明釉を施したと思われるが風化で不明瞭 外 体部上半は黒褐色釉の後白色釉を波状、ハケ目状にかけ 体部下半は黒褐色釉が底部からかけられ口縁方向に流れる その後上半には透明釉が施されたと思うが風化で不明瞭			肥前	17C末～18C前半	反転復元	11
38	SK-1	陶器鉢	(25.20)	12.30	高台径(11.20)	ロクロ	内白色釉ハケ目に上に透明釉 外その上に灰緑色の透明釉を一部に施す		肥前	17C末～18C前半	反転復元	11	
39	SK-1	陶器碗	—	(2.80)	高台径4.50	ロクロ	器面 風化が著しい 不透明釉		肥前	17C前半～	一部反転	11	
40	SK-1	陶器壺	—	(5.00)	(6.80)	ロクロ	赤褐色10R4/3		関西系	18C～19C	外面は器面に加工を施しているように思われる 塗布剤は不明 反転復元	11	
41	SK-1	陶器壺	—	(9.30)	—	ロクロ	灰オーラー色を帯びた不透明釉 頸部～肩部に灰色の釉を施す				肩部に耳を貼付する 反転復元	11	
42	SK-1	陶器擂鉢	—	(10.90)	—	ロクロ	内 暗赤灰7.5R4/1 外 灰赤7.5R4/2		堺	18C後半～19C		12	
43	SK-1	陶器擂鉢	—	(8.30)	—	ロクロ	赤褐色、暗紫色で薄くかかる			18C後半～19C		12	
44	SK-1	陶器擂鉢	22.40	8.00	高台径11.40	ロクロ	暗赤褐5YR3/2～暗灰N3/			18C後半～19C	反転復元	12	
45	SK-1	陶器擂鉢	—	(3.90)	—	ロクロ	暗赤灰2.5YR3/1を呈する 不透明釉 光沢は弱い			18Cか?		12	
46	SK-1	陶器擂鉢	—	(4.80)	—	ロクロ	暗赤灰10R4/1を呈す		堺	18C後半～19C		12	
47	SK-1	陶器瓶	—	(4.50)	—	ロクロ	内 透明釉 光沢あり 外 やや緑色みを帯びた明青色釉 上からコバルトブルーの釉を施す 失透性的の釉		関西系	18C～19C	反転復元	12	
48	SK-1	陶器?	—	(4.00)	—	ロクロ	淡灰緑色透明釉					12	
49	SK-1	土師質土器羽釜	(18.40)	(7.05)	—	ロクロ	内 にぶい黄橙10YR7/3 褐灰10YR4/1 外 にぶい黄橙10YR6/3 褐灰10YR4/1 黒褐10YR3/1				反転復元	12	
50	SK-1	銅製品キセル	長6.95	重13.9	—	ロクロ						12	
51	SK-2	磁器碗	(10.00)	5.30	高台径4.00	ロクロ	少し青みがかった透明釉	(外)コンニャク印判	肥前	1690～1740	くわらんか手一部反転	12	

第5表 遺物観察表2

No.	遺構番号	器種・種別	法量			成形	装飾		製作地	製作年代	備考	図版No.
			口径	器高	底径		給付釉薬	文様				
52	SK-2	磁器碗	5.10	(4.70)	—	ロクロ	透明釉		肥前	18C後半~	白磁碗	12
53	SK-2	磁器碗	(13.80)	4.80	高台径(8.10)	ロクロ	少し青みがかった透明釉	(内外)染付	肥前	18C後半~	反転復元	12
54	SK-2	磁器碗	10.20	5.90	高台径4.10	ロクロ	少し青みがかった透明釉 白濁	(外)染付	肥前	18C後半~	くらわんか手	12
55	SK-2	磁器碗	9.40	5.50	高台径4.20	ロクロ	わずかに青みがかった透明釉	(内外)染付	瀬戸美濃	1810~1860		12
56	SK-2	磁器碗	9.90	4.10	高台径3.70	ロクロ	透明釉 貫入あり	(内外)染付	肥前	18C後半~	小広東碗	12
57	SK-2	磁器皿		(2.20)	高台径15.20	ロクロ	白色透明釉	(内外)染付	肥前	18C後半~	高台「奇玉宝鼎之珍」銘	13
58	SK-2	磁器皿	(12.70)	2.80	7.70	ロクロ	少し青みがかった透明釉	(内外)染付	肥前	18C後半~	一部反転	13
59	SK-2	磁器皿	(13.60)	2.70	高台径(9.00)	ロクロ	少し青みがかった透明釉 貫入あり	(内外)染付	肥前	18C~	反転復元	13
60	SK-2	陶器燭台	5.10	6.25~6.40	高台径4.30	ロクロ	褐7.5YR4/3~黒褐7.5YR3/1を呈す不透明釉 光沢あり		関西系	18C後半~		13
61	SK-2	陶器灯明受皿	(9.40)	3.15	受部径5.00底径3.45	ロクロ	暗褐10YR3/3を呈す不透明釉 光沢あり		関西系		一部反転	13
62	SK-2	陶器碗	(13.30)	4.60	高台径4.60	ロクロ	淡緑灰色透明釉 貫入あり	(内)染付	肥前	18C後半~19C前半	見込みに絵 一部反転	13
63	SK-2	陶器碗	11.10	6.20	高台径5.30	ロクロ	わずかに青みがかった灰色で透明釉	(外)陶胎染付	肥前	17C後半~		13
64	SK-2	陶器碗	10.00	6.10	高台径4.10	ロクロ	淡緑灰色透明釉	(外)鉄絵	関西系	18C後半~19C前半	くわらんか手	13
65	SK-2	陶器碗	8.90	4.70~4.80	高台径3.00	ロクロ	灰白5Y8/1を呈し不透明釉 内面に貫入あり		信楽系	18C後半~19C前半	焼成不良	13
66	SK-2	陶器蓋	7.40	2.30	4.20	ロクロ	淡灰緑色 半透明釉		関西系	18C後半~	土瓶の蓋	13
67	SK-2	陶器蓋	9.00	2.70	つまみ径3.70	ロクロ	透明釉の上から体部内外面に灰白色の不透明釉を施す 光沢あり		萩	19C前半~中頃		13
68	SK-2	陶器瓶	—	(7.80)	高台径(5.80)	ロクロ	淡灰緑色透明釉 貫入あり		瀬戸美濃	18C~19C	反転復元	13
69	SK-2	陶器瓶	(9.00)	(4.90)	—	ロクロ	内灰N5/暗灰黄2.5Y5/2 外灰N41				反転復元	13
70	SK-2	陶器擂鉢	30.00	10.30~10.55	15.20	ロクロ	内明赤褐2.5YR5/8 外明赤褐2.5YR5/8 施釉部 暗赤褐5YR3/2		堺	18C後半~19C前半		13
71	SK-2	土師器小皿	8.60	1.60~1.70	6.00	ロクロ	内橙5YR6/6 外橙5YR6/6にぶい黄橙10YR7/3					14
72	SK-2	土師器灯明皿	10.50	1.55~1.70	5.15	ロクロ	赤褐10YR4/4の塗料を焼成後塗布			18C~	口縁にススが付着	14
73	SK-2	瓦質土器コノロ	—	(6.90)	高台(24.00)	ロクロ	内にぶい橙7.5YR7/4 外橙5YR6/6			18C後半~	反転復元	14
74	SK-2	瓦質土器十能	18.30	4.30	17.40	ロクロ	内外ともに淡橙褐色		高村	18C後半~19C		14
75	SK-2	土師質土器焰燒	(33.60)	8.30	—		内淡黄褐色 外淡黄褐色 淡褐灰色		高村	18C後半~19C	反転復元	14
76	SK-2	瓦質土器軒平瓦	タテ4.80	—	—		灰N4/暗灰N3/					14
77	SK-2	瓦質土器軒丸瓦	タテ8.40	ヨコ8.20	厚さ1.90		暗灰N3/灰N4/	巴文				14
78	SK-2	石製品猿	幅5.80	高(5.60)	厚6.00		灰色 顔面と耳内に灰赤色の彩色 目に黒色の彩色					14
79	SK-2	石製品硯	タテ(5.00)	ヨコ4.90	高さ0.90							14
80	SK-4	磁器盃	8.00	3.40	高台径2.80	ロクロ	やや灰色みを帯びた透明釉 光沢あり	(外)染付	肥前	18C後半~19C	発色が悪く黒ずむ。紅血色。	15
81	SK-4	磁器碗	(11.20)	5.60	高台径(4.40)	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外)輪宝繋文	肥前	18C~	反転復元	15
82	SK-4	磁器碗	8.80	5.40	高台径(3.30)	ロクロ	やや灰色みを帯びた透明釉 光沢あり	(内)太陽文(外)染付	肥前	18C~	吳須の発色が悪くやや黒ずむ一部反転	15
83	SK-4	磁器碗	11.40	6.00~6.10	高台径4.60	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外)染付	肥前	18C後半~		15
84	SK-4	磁器碗	8.20	5.70~5.80	3.50	ロクロ	乳白色を帯びた不透明釉 光沢は弱い	(内)太陽文(外)染付	肥前	18C後半~19C前半		15
85	SK-4	磁器蓋	10.10	2.60	つまみ径5.40	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内)染付(外)竹林賀人	肥前	1780~1810	広東碗の蓋	15
86	SK-4	磁器蓋	10.60	3.10	つまみ径4.30	ロクロ	少し青みがかった透明釉	(内外)染付	肥前	1780~1810	広東碗の蓋	15
87	SK-4	磁器蓋	(10.40)	2.80	つまみ径5.80	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外)染付	肥前	1780~1810	一部反転	15
88	SK-4	磁器蓋	12.20	2.70	つまみ径1.85	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(外)染付	肥前	18C後半~19C	段重の蓋	15
89	SK-4	磁器広東碗	—	(4.30)	高台径5.90	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外)染付	肥前	1780~1810	一部反転	15
90	SK-4	磁器皿	21.00	3.10	高台径12.00	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内)山水	肥前	19C前半~中頃		15
91	SK-4	陶器蓋	9.90	2.30	5.50	ロクロ	褐色不透明釉の上から暗褐色不透明釉		関西系	18C後半~19C		16
92	SK-4	陶器急須	—	(9.45)	—	ロクロ	暗赤褐10R3/2を呈し不透明釉 光沢あり		関西系	18C後半~19C	反転復元	16
93	SK-4	陶器瓶	—	(9.90)	(10.20)	ロクロ	内 黒褐色釉 外 白色釉と透明釉				反転復元	16
94	SK-4	陶器?	—	(1.70)	—		明緑色を呈す透明釉 光沢あり 貫入あり		関西系	18C後半~		16
95	SK-4	陶器甕	—	(7.40)	—	ロクロ	暗赤褐5YR3/3~にぶい褐7.5YR5/4を呈す不透明釉 上から黒褐色釉灰白色釉を施釉 光沢あり		関西系	18C後半~19C		16
96	SK-4	陶器甕	(27.00)	(7.40)	—	ロクロ	暗赤褐5YR3/3の不透明釉の上から 灰白色の釉を施す 光沢あり		関西系	18C後半~19C	反転復元	16
97	SK-4	陶器擂鉢	(32.60)	11.70	(15.90)	ロクロ	暗赤灰2.5YR3/1を呈し不透明釉		堺	18C後半~19C	反転復元	16
98	SK-4	土師器高杯	—	(6.80)	脚据部径(12.40)		内面灰褐色 橙褐色 外面淡灰褐色 黄褐色				一部反転	16
99	SK-4	土師器小皿	7.20	0.70~0.90	5.40	ロクロ	内にぶい黄橙10YR7/3 外にぶい橙7.5YR7/4					16

第6表 遺物観察表3

No.	遺構番号	器種・種別	法量			成形	装飾		製作地	製作年代	備考	図版No.
			口径	器高	底径		給付釉薬	文様				
100	SK-4	土師質土器?	—	(2.10)	3.30		内外ともににぶい橙 5YR6/4					16
101	SK-4	土師質土器土人形	高 3.00	幅 2.55	厚 1.40		黄橙～橙色					16
102	SK-4	瓦質土器?	タテ 4.55	ヨコ 4.35	—		灰 N4/ 灰 N5/				穴の用途不明	16
103	SK-5	磁器皿	14.00	4.90～5.00	高台径 7.80	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり褐斑あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～		17
104	SK-5	磁器なます皿	(14.70)	4.20	(9.00)	ロクロ	少し青みがかった透明釉	(内外) 染付			一部反転	17
105	SK-5	磁器皿	—	(2.20)	高台径 6.60	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内) 山水	肥前	18C 後半～19C	一部反転	17
106	SK-5	磁器碗	10.80	6.70	4.40	ロクロ	青みがかった半透明釉 貫入あり	(外) 陶胎染付	肥前	17C 後半～18C 前半	くらわんか手	17
107	SK-5	磁器碗	11.20	6.10	高台径 6.40	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内) 染付 (外) なすな文	肥前	1780～1810	広東碗	17
108	SK-5	磁器鉢	(11.80)	6.20	高台径 5.20	ロクロ	やや青みがかった透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～19C	一部反転	17
109	SK-5	磁器碗	(11.60)	6.35	6.55	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内) 染付 (外) 寿福	肥前	1780～1810	一部反転、広東碗	17
110	SK-5	磁器碗	10.20	6.05～6.10	—	ロクロ	灰色を帯びた透明釉 光沢あり	(内) 寿 (外) 染付	肥前	18C 後半～19C		17
111	SK-5	磁器碗	10.40	5.95～6.00	高台径 4.40	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～		17
112	SK-5	磁器碗	11.20	6.00	高台径 4.70	ロクロ	やや青みがかった透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～		17
113	SK-5	磁器碗	10.00	5.10～5.15	高台径 4.00	ロクロ	青みを帯びた透明釉 光沢あり 細い貫入あり	(外) 染付	肥前	18C 後半～19C	口線に歪みあり くらわんか手	18
114	SK-5	磁器碗	—	(3.00)	高台径 3.80	ロクロ	やや灰色みを帯びた透明釉 光沢あり	(外) 染付	肥前	18C 後半～	呉須の堀色が悪く黒褐色を呈す 一部反転	18
115	SK-5	磁器碗	(7.80)	5.20	高台径 (3.20)	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前		波佐見 反転復元	18
116	SK-5	磁器碗	11.00	6.00～6.15	高台径 4.60	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内) 染付 (外) 山水				18
117	SK-5	磁器碗	(12.00)	(3.50)	—	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～19C 前半	外面に熔着片 反転復元	18
118	SK-5	磁器碗	(12.00)	4.00	—	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり 貫入あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～	反転復元	18
119	SK-5	磁器筒型碗	(8.10)	(6.10)	—	ロクロ	内面 淡く水色みを帯びた透明釉 外面 緑灰色みを帯びた半透明釉 光沢あり 底部に貫入	(内) 染付	肥前	18C 後半～19C 前半	外面青磁釉 反転復元	18
120	SK-5	磁器小碗	8.80	4.40～4.70	3.00	ロクロ	やや黄色みを帯びた透明釉 細い貫入あり 光沢あり		信楽系	18C 後半～19C 前半		18
121	SK-5	磁器小碗	8.80	4.80～5.05	2.70	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 細い貫入あり 光沢あり		信楽系	18C 後半～19C 前半		18
122	SK-5	磁器小杯	6.30	3.15	高台径 2.80	ロクロ	透明釉 光沢あり		関西系	19C 前半～	見込みに色絵 薄手酒盃	18
123	SK-5	磁器徳利	—	(5.00)	—	ロクロ	灰白色を呈す 白濁 光沢あり	(外) たこ唐草	肥前	18C 後半～19C 前半		18
124	SK-5	磁器油壺	2.30	8.00～8.10	高台径 4.20	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり 一部に貫入あり	(外) 染付	肥前	18C 後半～19C 前半		18
125	SK-5	磁器段重	(14.80)	5.20	高台径 (9.30)	ロクロ	やや青みがかった透明釉 光沢あり	(外) 染付	肥前	18C 後半～19C 前半	反転復元	18
126	SK-5	磁器鉢	(16.40)	(5.40)	—	ロクロ	青みがかった透明釉 光沢あり	(外) なすな文	肥前	18C 後半～	反転復元	18
127	SK-5	磁器鉢	(12.40)	(5.00)	—	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内) 染付	肥前	18C 後半～	反転復元	18
128	SK-5	磁器鉢	—	(5.25)	高台径 (7.70)	ロクロ	やや青みを帯びた透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～19C	部体は八角になる 反転復元	18
129	SK-5	陶器碗	10.80	6.80	高台径 4.60	ロクロ	淡灰緑色 半透明釉 貫入あり	(外) 陶胎染付	肥前	17C 後半～18C 前半	外面に鉄絵	18
130	SK-5	陶器蓋	8.70	2.40	4.10		淡灰緑色 透明の上から白色の釉		関西系	18C 後半～19C 前半	土瓶の蓋	18
131	SK-5	陶器蓋	8.40	2.20	受部径 11.20	ロクロ	内面 少し緑み帯びる灰色 外面 灰色		関西系	18C 後半～19C 前半	土瓶の蓋	18
132	SK-5	陶器燭台	上部 5.50 台部 8.80	2.90	—	ロクロ	暗赤褐色 不透明釉					18
133	SK-5	陶器壺	(16.00)	(7.20)	—	ロクロ	暗赤褐色を呈し不透で光沢あり 部分的に黒変		関西系	18C 後半～	反転復元	19
134	SK-5	陶器火鉢取手	—	(4.65)	—	ロクロ	濃緑色を呈す透明釉 光沢あり 貫入あり		瀬戸美濃	18C 後半～		19
135	SK-5	瓦軒平瓦	タテ 4.00	ヨコ 14.00	厚さ 2.50		暗灰 N31					19
136	SK-5	瓦質土器焜炉脚	タテ 10.40	ヨコ 11.90	高さ 10.70		内 にぶい黄橙 10YR7/3 外 暗灰 N 3/			19C 前半～		19
137	SK-5	土製品トチン	—	(8.50)	—		黄褐色 橙褐色 暗灰色 降灰は暗赤褐色				天地不明 一部反転	19
138	SK-6	磁器小碗	—	(4.20)	—	ロクロ	淡緑色透明釉 貫入あり		信楽系	18C 後半～19C 前半		19
139	SK-6	陶器蓋	(14.80)	(2.40)	—	ロクロ	褐色で不透明釉			18C 後半～19C 前半	行平鍋の蓋	19
140	SK-12	土師器甕	—	(3.55)	—		内外ともに 浅黄橙 10YR8/4 橙 7.5YR7/6					19
141	SK-12	須恵器坏身	(13.50)	3.90	受部 (15.50)	ロクロ	内 灰 N6/ 外 灰 N5/			7C 初頭	反転復元	19
142	一括	磁器蓋	10.60	2.80	つまみ径 5.60	ロクロ	やや青みがかった透明釉 光沢あり	(内) 染付 (外) 寿福	肥前	1780～1810	広東碗の蓋	19
143	一括	磁器蓋	(10.20)	2.60	つまみ径 5.40	ロクロ	青みがかった透明釉 光沢あり	(内) 染付 (外) なすな文	肥前	1780～1810	広東碗の蓋	19
144	一括	磁器碗	(9.80)	(3.70)	—	ロクロ	青みがかった透明釉 光沢あり	(内外) 染付	肥前	18C 後半～	丸碗	19
145	一括	磁器段重	—	(1.40)	高台径 (6.60)	ロクロ	わずかに灰色を帯びた透明釉 光沢あり		磁器	18C 後半～19C 前半	反転復元	19
146	一括	磁器皿	(21.80)	2.80	(14.50)	ロクロ	少し青みを帯びた透明釉			18C 後半～	焼き継ぎしている 反転復元	19
147	一括	磁器皿	(14.60)	3.70	高台径 (8.20)	ロクロ	青みがかった透明釉 光沢あり	(内) たこ唐草 (外) 松竹梅	肥前	18C 後半～	反転復元	19

写 真 図 版

写真図版 1 古金谷ノ丁地区



全景（東から）



SK-5 北壁



SD-1（北から）



北壁 14・17 層遺物出土状況（南から）

写真図版2 森ノ丁地区



全景（西から）



SK-1 東から



SK-4 完堀（東から）



SK-5 南壁



SK-2（西から）



SK-2 遺物出土状況（西から）

写真図版 3 出土遺物



1

2

3

4



5

7

8

9



10



11



12



13



14



15



16

写真図版 4 出土遺物



17



18



19



20



21



22



23



24



25a



25b



27



32



33



39



40



41

写真図版 5 出土遺物



42



43



45



46



47



48



49



50



52



60



61



65



67



68



69



71

写真図版 6 出土遺物



73



74



75



76



77



78a



78b



79



92



94



97



98



99



100



101a



101b



102a



102b



130



131



132



133



134



135



136



137

報 告 書 抄 錄

書 名	ナカツジョウカマチイセキ 中津城下町遺跡 11次調査							
副 書 名	市道山ノ神森ノ丁線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷 次								
シ リ ー ズ 名	中津市文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第 68 集							
編 集 者 名	浦井 直幸							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒 871-8501 中津市豊田町 14 番地 3 Tel:0979-22-1111							
発 行 年 月 日	平成 26 年 3 月 31 日							
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面 積	調査原因
中津城下町遺跡	大分県中津市 2196-2 他	44203	203002	33° 35' 60"	131° 10' 50"	20080501 ~ 20080521	160m ²	市道新設
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中津城下町遺跡	城下町	近世	土坑・溝	陶磁器		18世紀後半～19世紀前半以降に造られた遺構群。		
要 約	調査区内において 18世紀後半から 19世紀前半代以降の土坑群や溝跡を発見した。当時の武家屋敷跡、背割水路の状況を理解する上で貴重な資料を得た。							

中津城下町遺跡 11 次調査

市道山ノ神森ノ丁線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第 68 集

2014 年 3 月 29 日

発行 中津市教育委員会

印刷 高橋印刷所